

## 史料紹介 森本州平日記（八）

東京大学大学院  
日本近代政治史ゼミ

### はじめに

本年翻刻する森本州平日記は、一九三一（昭和六）年七月一日から九月三十日までの三か月分となる。これに先立つ年の「史料紹介 森本州平日記」については、東京大学学術機関レポジトリ（UTokyo Repository）によってインターネット上で『東京大学日本史学研究室紀要』が利用できる（<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/bulletin/77-15>）のでご覧いただきたい。

日記の書き手である森本州平（一八八五年～一九七一年）が昭和戦前期にあつて当主をつとめた森本家は、長野県松尾村（現飯田市松尾）の旧家であり、森本家に伝来した文書の詳細については、飯田市歴史研究所編『飯田下伊那地域史料現況記録調査報告書1 飯田市松尾新井森本家（大森本）文書』（二〇〇八年）、同編『史料で読む 飯田・下伊那の歴史1 松尾大森本の家と周辺の社会』（二〇〇九年）

に詳しい。

本号所載の日記の内容は、次年度翻刻予定の一九三一年十月一日から十二月三十一日に記載されている内容と密接不可分であることから、次回翻刻時の解題で一括して解説を加えることとした。そのかわりに、本号では比較的詳細な「語句の説明」をつけた。

筆耕には、大学院生の梅本肇、賀申杰、鈴木智行、吉田ますみ、アン・ジェイク、石野夏幹、崎島達矢、佐藤大悟、飯島直樹、塚原浩太郎、三村佳緒、学部研究生の谷川みらい、学部生の原基香、増田由貴、門脇愛、小峯啓があたった。語句の説明には、梅本、賀、吉田、アン、石野、崎島、佐藤、飯島、塚原、三村があたった（いずれも二〇一六年三月時点の所属）。

日記の翻刻にあたっては、漢字片仮名表記を漢字平仮名表記に改め、旧字体を新字体に改め、不明文字については□で表記した他、可能な限り原文に忠実に起こした。なお、ごく一部、森本家にかかわる私的な記述、個人に関する評価にかかわる記述などにつき、「前略」、「後

略)として削除したほか、\*\*\*などにより伏せ字扱いとした。

最後になりましたが、森本州平日記を、東京大学文学部日本史学研究室の学生・院生が自由に読み、かつ翻刻することをお許しください、翻刻文について丁寧にご助言を下さった、日記原本所有者で現森本家当主の森本信正氏に厚くお礼申し上げます。また、常に惜しみなくお力をお貸し下さる飯田市歴史研究所調査研究員齊藤俊江氏にも厚くお礼申し上げます。

(加藤陽子)

森本州平日記 一九三一(昭和六)年

七月一日 水曜

曇後雨。組合が休みなので、直に銀行へ出勤した。銀行の室内へ生花をして蓐(はなふさ、がく)を生けた。頭取の無趣味に一点の趣味を添へた。各支店の貸付係会議を開いたので、其れに出席して種々貸付に対する方策を講じた。殆んど終日此貸付係会議に終つた。粥川進策氏より猶興社印刷部寄附金百円(四分利公債)、現金六十円を添へて送付してよこした。中原へ話しかけたが、何の返事もなかつた。今日から各課帳簿につき一一点検する事となつたので、各課から帳簿を提出して其の事務を見た。伊久間、吉沢武夫に関する貸付金に付て、吉沢秀雄方へ其督促に行つて来いと云ふ事は(田間はのへ秀雄が合資会社を組織する用意ありと見て)大に難事であつた。此んな事に付て予の返事が餘りに其の問題を理由付ける為に、口実を齒でうけた感がある。此んな問題は困つた時は肚裡で受け置くべきである。

農休みであるので廉太郎か遊に來た。夕食を共にして泊つて歸つた。予記 今日より銀行各課帳簿を見る。

七月二日 木曜

晴曇。組合を経て銀行へ行く。組合にては、陽皇社長幾島衛太郎氏の組合葬あり。香奠を聯合事務所に送り、夏目に頼みて部会より持参して貰ふ事とせり。銀行に於ては、期末より期始の転換期にて多忙なり。宮沢要治郎を召致して中沢支店閉鎖の件同意を求めた処、賛意を表したるに付、来る総会にて定款変更の決議をなして之を執行する事としたり。此日午後三時より勤労党準備委員会、商業会議所に於て開かれ、出席する筈なりしが、山口正紀來行して半田式の器械の宣伝に來り面会し、次で中原と相謀りて本日の会議の話をなし、勤労党に於て七月十日頃を期して鹿子木、本田両氏を招して発会式大会を催す事とし、既成政党を屈服せしむる手段を講ずる事とし、其相談ある筈なりしも、予は出席一寸顔を出したるのみにて終り、龍門寺の無尽世話人として講へ出席す。講終了に近きたる頃、北川勘三郎出金の賞与を出さんと提議あり。和尚の一喝を喫して引下る。

予記 \*沢\*、無銭飲食をなしたりとて新聞記事に出て、寺にて平栗と予と和尚の三人、善後策を講じたるも、其れに反省して将来を戒めたり。十二時帰宅。

【語句の説明】半田式：一九三〇年、半田貞五郎により完成、発売された金属製固定式多糸繰糸機。緒数は二十条。三〇年時点で九県七七工場へ二千余台を納入していた。

七月三日 金曜

時々曇。霖雨晴れず時々雷。銀行へ直に出勤す。喬木館へ貸金の催促に行く事となり、福住善治を同伴して吉沢武夫方に乘込む。野原弘一も亦來り、工も來り会し、坐敷にて種々協議す。先方の申出は、廿

方に近き借金を一本証書に改められたき事、本年の利子として金貳千円を支払ふべしとの事なり。親戚は如何に誠意を示すかとの点に付、種々交渉したるも、以上何の爲す事も出来ざる旨を答へたれば、兎に角今後福住善治氏を介して交渉する事と決し、酒を出して饗応をうけ、雨傘を借りて帰る。親戚続き柄の間に貸金の催促はよくなきものにて、此の交渉は最も苦痛とする処の一なりし。銀行業のイヤな業なるをつくく体験を得たり。午後七時帰宅し、夕食入浴後再び組合支所に行き、役員会に出席して規画統一、指定蚕種家推薦の件につきて協議し、村内蚕種家全部、村外も多少加入して、之を以て組合にて蚕種製造金代〔代金〕配布の前提とせり。協議終了して帰る。十二時。予記 丸山鶴弥の弔辞を春男より頼まれたり。

社会の今日 世相悪化し、都鄙共に鬭争堪へず。

【語句の説明】①喬木館：喬木村の製糸業者。一九一四年に松尾村に蚕部を設け、蚕種を製造した。三七年、大龍社（下伊那蚕種共同施設組合）に参加。

②規画統一、指定蚕種家推薦の件：長野県は蚕品種整理統一の手段として、県指定の優良蚕品種は交雑確実かつ強健無毒な蚕種を製造するよう蚕種製造家を奨励指導、推薦した。制度導入は一九三〇年台初期に検討されたが、組織改革問題を優先したためか、州平らの伊那社は天竜社へ社名を変更したのちの三六年に指定蚕種家制度を取り入れ、指定品種の統一改善により原料繭の向上を目途に蚕種対策を進めた。

七月四日 土曜

晴雨半す。銀行午後一時より重役会を開くに付、直に出行す。佐々

木、野原番頭其他来行し面接す。利子として毎月七十円と当方百円との間に押問答せるも決せず。午後樓上に大口喜六氏の講演会あり、行きて見る。伊原、山口の重役来行せり。安田銀行を訪問し山口氏の調印を求める為、引受証を借り来り加判せしむ。重役会に於ては、頭取と予との間に説明の異なる点数多あり、大に困却せり。重役会終了したるも宴会をせずして散会す。此日の重役会に於て、説明すべき原案に付、其の意向を充分取り居らざりし為、稍説明にも前後する所ありたり。近來頭脳明晰を欠き、健忘症に陥りたるが如し。天下に勤勞を勤め、東洋思想國粹を發起して世界を風靡せんとす。志徒に大にして実行伴はず。丸山鶴弥の葬儀あり。耕地より贈る弔詞及堤防組合より贈るものに付、予て依頼せられたれば、書きて贈る事とせり。予記 晴曇常ならず。

社会の今日 共産党法廷にて演舌会を開く。

【語句の説明】①大口喜六：一八七〇～一九五七年。一九〇二年衆議院議員に初当選、以来当選十回、三二年間在職。政友会総務・同政務調査会長を務める。一九二七年田中義一内閣の大蔵政務次官に就任。当時、政友会顧問。

②堤防組合：水防組合のことか。松尾村には下島、沖の島、松川の水防組合があり治水を行っていたが、地元村だけでは不十分かつ県の土木事業が遅滞していたため、一八九三年に下伊那郡の各町村長が下伊那郡土木協会を組織し、自営堤防が多く建設された。一九〇三年に松川は一等河川、一〇年に天竜川は内務省管轄河川となり、県費・国費による工事が行われたが、三一年以後の満州事変とその後の戦線拡大の影響で堤防工事は停滞した。

七月五日 日曜

晴、暑気強し。金田投網に來り訪ふ。共に天童川に投網を試む。君子は網せずとあるも、久し振りにて網し十数尾を獲たり。所藏の網は鼠に食はれて用をなさず。投網終りて、橋本屋に昼食を金田と共に喫したり。橋本屋電話講を買収すべく父は奔走せり。竹泉堂來遊し、父母を説きて四方八方の経済界打撃につき話せるもの、如し。大橋田間善治葬式あり。告別式にて会葬す。会葬終りて上飯、蕉梧堂に伊原の召宴に列す。來会者廿名計り。宴終らざるに神榮会社の小菅面会し度と申込あり、面接す。山本組合へ、小菅召介状を書き与へ置けり。夜に入りて帰宅す。竹泉堂泊る。組合に立寄りたるに、小菅より当限を売り月末に現物を渡すの有利なる話、青山よりありたり。世相險惡にして、合法的鬭争極点に達せるもの、如し。年一、年政党の色は強く、国歩艱難の度を加ふるが如し。

予記 橋本屋、金田と昼食、未払。

【語句の説明】電話講：講とは、地域社会をおもな母体として、信仰、経済、職業上の目的を達成するために結ばれた集団。本来は仏典を講説するための僧尼の会合やその団体を意味していた。

七月六日 月曜

雨。梅雨の如き天候にて湿潤なり。組合支所を工場の隅迄見廻りて後上飯。午前十一時銀行へ出勤す。(中略)午後三時退出して伊那社役員会に出席す。伊那社は四月頃より予算による聯合会制度となりしが、販売聯合の為業蹟挙げず常にグラつき居たり。清水会長になりても同しくグラ付居り近來愈々甚しからんとせるに對し、予は更生伊那社の為、前役員は全部総辭職を行ひ以て気分を一新せんと試みたりし

が、出席役員全部辭職する事となり辭表を呈出して出席役員も同様の事をなせり。原貞治郎來り立合ひたれば共に打合をなしたり。

予は伊那社の聯合販売統制の出來ざる以所を述べたり。則ち昨年直輸出論の出てたる時之を主唱したりと前提して、一、各組合能率本位のもの、二、精品本位のもの、三、中間のもの、此三者を合併して販売するは精品のものは下品のものと同率の販売をうくるは不利である、依て各々単独出荷となるのである。故に予は昨年直輸出論の出てたる時、寧ろ退いて製品を統一する事を考へては如何と云ひしなり。

予記 伊那社役員辭表出。清水と喬木館に付て其の救済の案を立てたり。後銀行へ出て金田と支店長配置問題及原田支配人問題に付て講究せり。

社会の今日 労働党、大衆党、社民党等無産党合同成る。

【語句の説明】①伊那社：有限責任下伊那生糸販賣組合連合会伊那社のこと。一九二〇年五月に下伊那郡二十七組合が加入する形で、練糸の指導・生糸の検査の後、共同出荷することを目的として結成。

三二年に生産生糸の全てを伊那社に出荷する合同出荷を実現。三五年一月に解散。

②聯合会制度：昭和恐慌下の対応として、伊那郡の組合製糸は再編成された。同制度は、連合会として郡下の数力所に四百釜内外の製糸工場を持ち、各町村組合で受け入れた繭を連合会に供繭して連合会の工場で練糸するもの。

③清水会長：清水謹一(一八六八〜一九六四年)。伊那社会長(一九三〇年二月〜三二年七月)。長野県師範学校・日本大学を卒業後に木曾で製糸会社を設立し、一九二五年には有限責任伊賀良信販購利組合伊賀良館の二代目組合長に就任。伊那社会長辭職後は伊賀良村

村議、村長（一九三八〜四〇年）を務めた。

④直輸出論：伊那社は生糸の共同出荷分を直接アメリカに輸出するため、ニューヨークのE・ジャリー商会と交渉を進め、一九三〇年七月に取引細目の協定を結び、横浜市に伊那社の出張所を設けて国際生糸株式会社横浜支社の扱いで直輸出を行うことになった。このE・ジャリー商会は中信地方の普及社や安曇社なども取引したところであったが、伊那社は三一年にはこの取引を中止した。

⑤製品を統一：出荷、輸出する生糸の品質を統一すること。その手段として、一部の有力製糸家は蚕種業を兼営するとともに、養蚕家と特約組合を結んだ。伊那社も組合関係者に強い指導力を發揮する必要があったといえる。

⑥無産政党合同：七月五日、東京芝協調会館において労農党・社会民衆党の合同賛成派・全国大衆党の合同大会が開かれた。党名を全国労農大衆党とし、書記長に麻生久を選出した。

七月七日 火曜

雨晴。組合支所に行き工場を一巡して後上飯、出行す。組合にては生糸優良のものを作製するに其の方法を講し居り。予は試験を云々し青山はやらして見ると力み居れり。専務に一任して後上飯したり。愛知銀行より取引皆無なる取引先整理の旨回答に付出名する事となり、石川を同伴して名古屋行を策す。居眠をなし居り事務進捗せず。睡気のみ多くして自分乍ら病的を恐れたり。岩崎来行し宇垣前陸相と南現陸相との人物を月旦せり。予は寧ろ南氏が朝鮮及満州に師団を増設する案を出したるは日本の大陸政策を行ふ点に於て大に宜し、寧ろ満州に三箇師団を置きて屯田兵制とし二三□防をして之に当らしむる事

とせはよき論をなせり。内地には十ヶ師団もあれば充分なり。朝鮮満州に重を置くべしと論せり。放課後出名、愛知Bの用件及頭取と人事問題に付話をなす。

発信 池田寿

【語句の説明】師団を増設：南次郎陸相は七月二日、朝鮮と台湾の師団増設と満州での駐節師団（内地師団との二年交代制）の常駐化などの外地兵備改編計画を含む軍制改革案を内閣に提出した。宇垣一成前陸相は朝鮮師団増設を認めていたが、満州での常駐師団設置は構想していなかったため、南の改革案は宇垣よりも積極的な外地兵備改編を意図したものであった。なお、当時内地には十五個師団、朝鮮に二個師団、満州に独立守備隊（六個大隊規模）が配備されていた。

七月八日 水曜

曇晴。陰鬱なる日なり。直に銀行へ出勤す。組合製糸部青山の指図と現業との間に差あり、糸条斑よろしからず研究中なり。銀行にては午後五時迄働いて、愛知銀行へ為替取引整理問題に付て之を再考を促すべく名古屋へ行く。石川一郎を同伴す。大平自動車にて出発、日暮に大平峠を車中に登れば雲深くして陰湿の林間を自動車走る。旅客七八名あり皆名古屋行ならん。三留野より汽車に移乗して名古屋着、午後十一時半なり。大松旅館に投泊す。名古屋は暑気強く、飯田に比して真夏の気候なり。暑くしてフトンを着て眠られぬ様なり。夏の大平越は爽快なりし。

共産党事件公判あり。群衆之れを傍聴せんと裁判所へ押かけたる写真店頭にあるを見る。

万宝山事件突発し鮮支人間に鬭争起る。

滿蒙政策として内地師団を滿州に移すは大に可。内地は十ヶ師団あれば可なり。大半は朝鮮滿州に移すべし。

社会の今日 共産党本部の公判あり、法廷にて演舌会を開く。

【語句の説明】①糸条斑：生糸の中に存在する太い斑のうち、比較的短糸長の斑のこと。生糸検査では、セリプレーン板に巻いた糸条の太さが肉眼によって識別できるほど濃度に変化して縦じま状となる。生糸の重大な欠点の一つであり、その多少は生糸品質の主要な指標となる。

②大平峠：木曾山脈の南部に位置し、伊那谷の飯田から木曾谷の妻籠に通ずる大平街道が通る。

③三留野：中山道の宿場町として発展した地。一九〇九年には中央線が三留野駅（現在の南木曾駅）まで開通し、下伊那から最も近い中央線の駅となった。以後名古屋へ向かう場合、大平街道と中山道を通って三留野駅まで行き、列車に乗るのが一般的となった。

④共産党事件公判：七日より四・一六事件で検挙された共産党員の統一審理が事実審理に入った。右翼団体が傍聴券を独占するとの噂をうけて、雨の中約四五〇名が傍聴券を待つ列をなした。

⑤万宝山事件：七月二日、吉林省長春県北西に位置する万宝山において、入植中の朝鮮人とそれに反発する現地中国人農民との水路に関する小競り合いから中国の警察が出勤し、それに対抗して動いた日本の警察と中国人農民が衝突した事件。死者はなかったが、この事件をきっかけに朝鮮半島で中国人に対する排斥運動が起こり、多くの死者重軽傷者を出した。

七月九日 木曜

晴。朝八時半に愛知銀行へ訪問す。案内人來り百十七銀行の方では御座らぬかと問はれたり。然りと答ふれば此方へと案内せられて階上の応接室に通さる。何故に百十七銀行のものなるかを知りたるか不明にていぶかし。暫く待ちたるに総務部長岩間昌生氏來りて面接し來意を告ぐ。取引先整理の結果止むを得すと語られたれば、御無理な御願なれとも先般（本月六日）の御返事のものに尚追加して大阪貴支店、当辰野、宮、八等の支店間及貴半田、当本店、赤穂間の取引だけは是非共存統せられたしと申込みたり。岩間氏手帳に記したり。尚営業部長久保寺、為替課長渡辺等に面会して辞す。次に村瀬、第一、名古屋等の店を訪問して仲神を栄町支店に訪問し、松阪屋を見、明治銀行伝馬町支店に丸山相楽を訪問して熱田神宮參拜後、新世界に仲神と夕食を共にして午後十一時夜行にて帰途に付く。終日銀行訪問疲労せり。

【語句の説明】①支店：一九二九年時点で、百十七銀行は飯田町本店のほか、辰野、宮田、八幡、赤穂、駒場、下条、市田、伊賀良、高遠、伊那、中沢、飯島、片桐、伝馬町の十四の支店を置いていた。②村瀬：村瀬銀行。愛知起業銀行（一八九八年設立）を改称し一九〇七年に設立された。大正から昭和にかけて同じく愛知に本店を置く尾濃銀行ら数行を買収・合併したが、三九年に廃業。

七月十日 金曜

曇雨。梅雨の後れにや鬱陶敷日続く。青葉の中を通る汽車快よし。電車線路の沿道緑野の中を走れば更に旅心地してよし。午前八時半飯田着、直に銀行へ出勤せり。終日事務を見る。頭取に上名、愛知銀行の報告をして為替取引の整備は多分効果ありし事と思ふと述へたり。

尚銀行にては、総務が指令を出す所にて現業に営業の大方針を示さしむるは無理なり、故に当行に於ても営業の大方針は頭取の腦中より出てさるべからずと説けり。放課後父より蕉梧堂へ来れとの事に蕉梧堂へ行く。「中略」蕉梧堂一室にて会し共に夕食をとりて、正木に証拠金と〔中略〕委任状を渡す。父と共に午後七時の自動車にて帰宅す。

〔後略〕。

七月十一日 土曜

雨。組合支所より上飯、銀行へ出勤す。組合にては繰糸法研究にて井深も其他の従業員も懸命なり。放課後中原より電話ありて午後四時頃吉野館へ来られたしとの事なり。午前十一時中谷、神永両氏来飯して百十七楼上に於て勤労党演舌会を開くべき旨話あり。曾てウスく其様な話を聞き及び居りしも、公然と誰よりも話なければ差ひかえ居たるに、中原より其話を聞きて放課後吉野館に中谷、神永両氏を訪ふ。午後七時より演舌会を開く。用意充分ならず、演題等を急き書き張り付等せり。中谷は当地の青年に弁士少しと怒る。出よと迫る。混雑せり。座光寺の開会の辞に次で宮沢茂雄一席弁し、中谷氏は支那の排日、露の五ヶ年計画、米の排日、英の対日政策等より国難の日に迫りつ、ある事より、内は思想に財政に政事に愈々紊乱し居る事を指摘し、既成政党、腐敗政事を痛論し無産政党の非国家的なる事を説き、最後に勤労党の主張を発表し伊那の明治維新の力を昭和維新に注げと結び、一時間半に亘り大演舌をなし終つて中原謹司挨拶をなし閉会。時に十一時半。吉野館に彌川と兩人にて青年を連れて中谷等を訪ひ話して午前一二時帰宅。

【語句の説明】支那の排日、露の五ヶ年計画、米の排日、英の対日政

策：中国では国民党が国権回復のため、中国各地で組織的な日本商品のボイコット（日貨排斥運動）を展開した。ソ連は第一次五年計画（一九二八―三二年）により、急激な重工業化と農業集団化を進め、急速な経済成長を遂げていた。米国は一九二四年の排日移民法制定やオレンジ計画策定など、日本への対抗措置をとり、英国とともに中国に関税自主権を認めるなど对中国政策の改善と同時に対日協調政策を後退させていった。

七月十二日 日曜

晴雨。金田投網を持ちて来訪せんかと待つ。併し来らず。組合支所より本所に行、本所にて専務に会いて農山漁村低利資金の実況視察に蚕業取締所より来る事及竹村藤一が竹村南信堂の名義により繭を出したる事等につきて協議した。それから午後中谷、神永は天龍峽を見物に行つたので帰りを組合本所に要して同伴し来り。工場内を一覽せしむ。然して日本の生命線か此生糸の繊弱なるものにある事を知らしむ。伴に飯田に電車にて同行し吉野館別館に憩ふ時に大衆新聞到着して披見するに勤労党を以て「インチキ」党とし「森本國精幹事長顔色なし」等の見出を以て書き連ね居り。中谷大に責（憤）激し斯の如き新聞は態度を以て之に対せしが、彼は喝して曰く「ソナナ態度だから愛国運動は出来ん」と。併し元より大衆新聞位なものとはタ、キツプス事は容易なるも、暴力団の如く勤労党が見らる、も苦しく陰忍せり。それから辞して南信新聞の重役会に臨む。仙寿楼にあり。出席僅に松下と原のみ。欠損二四五円を承認して児島牛肉店に登り三人にて夕食す。

予記 伊原五郎兵衛へ鶏卵五十ヶを病見舞として贈る。倉沢量世より彫刻渦を送り来り金を求む。田島啓次郎其織製せる白地ゆかたを送り来る。

受信 倉沢量世、木下勝男

社会の今日 巴里東京間直行飛行機来。

【語句の説明】①農山漁村低利資金：政府は農村救済策として各府県に割当額を定め総額七千万円の低利融資を行っていた。

②大衆新聞：信濃大衆新聞。北原亀二ら政治研究会下伊那支部（L Y Lの後身団体）の幹部によって、一九二六年創刊。

③南信新聞：一九〇二年一月に発刊。政友会系新聞。憲政会系の「伊那公報」や民政党系の「信濃時事」に対抗していた。全国的ニュースを主に扱った。

④小島牛肉店：明治に入り飯田で初めて牛肉を扱った店。

⑤倉沢量世：一八九五？。量世は本名、彫刻家としては興世と号する。泰阜小学校に勤務したのち上京、米原雲海に師事し、その才を認められ二十七歳のとき美術学校に入学、在校中に帝展初入選。泰阜小学校美術館建設に尽力、泰阜村名誉村民。

七月十三日 月曜

雨。直に出行す。今日は監査役会開かる、日にて日銀の吉村氏も来訪して伊那地方の産業組合に付て種々話し、彼は之を書き止めにせる。其の予が話せし事は産業組合の組合員訓練、中央金庫より投資したる額及銀行の投資の状況、農村の不況の状況、一般金融の状況等につき話したり。木下某（氏乗）来訪し農村疲弊して食へぬから使役してくれとの申込ありたるも、却て農村に引込み専心農業に従事するの有利なるを説き、都会就職難を物語れり。監査には上柳、太田の両氏来

行したるのみにて監査終了し、仙安に於て夕食をなす。上柳氏青年時代の話をなし、洋服を一番に着けたる事、俵を第一に輸入して川路に乗り行きたる事、電話の布設に尽力したる事、深山自由新聞の主筆として演舌をしたる事などを語れり。信也帰宅、和氣宮沢へ行き一週間計り居たるも同じく帰る。吉川虎治死し弔詞を見る。

【語句の説明】①日銀の吉村：日本銀行松本支店員、吉村のことか。

②深山自由新聞：一八八二年一月九日に長野県下伊那郡飯田町で発行された自由民権派の新聞。主として上・下伊那郡在住の自由民権家たちが出資して発刊された。同年十月以降何度も発行停止をうける。その後、経営難と新聞紙条例改正のため八三年六月に廃刊し、『伊奈新聞』となった。

七月十四日 火曜

雨。霖雨毎日降り鬱陶敷き事限りなし。銀行へ出勤す。電話をかけて組合より吉川虎治の葬式で読む弔詞及香奠をとりよせて提出す。午後一時半組合に行く予定を変更して直に吉本屋葬式に列す。野原、上柳と同行せり。二階にて小憩し出棺を待ちたり。午後一時より三時迄告別式あり、三時出棺す。龍門寺に於て執行せられ予は組合よりの弔辞を読む。再び銀行に帰りて事務を見て午後七時帰宅す。今日は頭痛し睡気催し如何ともし難し。銀行の前途を考へ組合の予に対する感想を見て甚た心不安なり。寧ろ銀行を止めて組合事業に没頭するの賢なるにしかずとも考ふれとも、今更ぬきさしならぬハメに陥りて銀行を出る事も出来ず。愛国勤労党、中原へ電話をかけしに、中原前橋の軍人会講習に出席すとて話も出来ず終る。「やまと心と独逸精神」を購



読す。鹿子木先生の愛国の情燃ゆるものあるを感す。愛国勤労党に對して大衆党の惡に筆誅を加ふる要あり。

発信 田島啓次郎、中元の礼。熊谷勝弥、トタン飼育標準の礼。

受信 木下勝男

【語句の説明】①「やまと心と独逸精神」…鹿子木眞信『やまとこ、ろと独乙精神』（民友社、一九三一年）のことを指す。鹿子木は一九二六年春から二九年にかけて日独文化交流事業に携わり、二七年からの二年間はベルリンに駐在してベルリン大学などで日本精神史の講義を行った。

②トタン飼育…トタン製の箱で稚蚕を箱の中で飼育する方法。箱は使用前に水に浸して乾燥するのを防ぐ。また箱の底に吸湿した焼糠を薄く敷くか、吸湿した蚕座紙または新聞紙を中に入れておく必要がある。

七月十五日 水曜

雨。午前九時銀行へ出勤す。組合練糸休業。祇園なりとて町内婦女子青年の出飯するもの多し。中心地へ集まるのは人類の常態なり。都会に地方は搾取せらるゝは自然の勢か。自分も農村より上飯して銀行業を営み、自ら自を許むいて生活の量とす。不自然なる生活哉。赤穂支店へ出張す。新井好吉病気の状況如何を見、且又事務に堪へ得るや否やを見る。宮沢支店長を呼びよせて新井の病状をきくに、大に快方に向ひ居れり。依て直に他に移動は困る様な口吻なり。精養軒に昼食をして状況を話す。其他支店の整理に付て鞭達して帰行す。電車中平野老に会い犬塚骨董屋とも話せり。赤穂行の電車中にては龍門寺和尚に面会し、池田寿の無尽金の事に付て話せり。中島やに洋画会ありて

其出品を見る。出品四、五十点ありたるも洋画なれば分らず。組合惣代に就て大石に話す。

原理日本社へ三円、倉沢量世へ三十円送金す。倉沢は其作品渦を送り付て金八十円を請求せしも田舎不景氣にて三十円だけ送る。

発信 倉沢量世。後援の意味にて三十円送る。

【語句の説明】①祇園…七月一四日頃から一五日頃にかけて飯田市街で行われた祇園祭のこと。当時は商店街の大売りだしと結びつき、活氣にあふれた行事となった。

②原理日本社…蓑田胸喜が三井甲之・松田福松と一九二五年に創立した右翼団体で、機関誌『原理日本』を刊行。とくに東京・京都両帝皇大学の進歩的・自由主義的教授の思想・学説を論難し、著書の発禁、追放、処罰など行政的処置を要求した。三三年の滝川事件、三五年の天皇機関説排撃の導火線となり、国体明徴運動を展開した。

七月十六日 木曜

雨。組合支所にて青山江塚と話したり。口挽を初めたれば出席して一場の挨拶を行ふ。竹村藤一が其の収繭を竹村一雄に売却し一雄の名義にて組合へ供繭したるは、藤一が自己の借金の差引かるゝも恐れてなしたる行為にして、青山は竹村要人、順一兩人を加へて其の訂正を迫りつゝ、ありしが、今日之の解決をなすべく話あり、之に当らしむる事とせり。午前十一時出行し、午後七時迄行務を見る。組合と銀行其の營業に於ては天地霄壤の差あり。銀行は其の借金に來るもの多くは銀行を引かけんとするもの多し。然るに産業組合は純真なる点に於て心地よし。銀行に在る間は油断もすきも出來ず。

帰宅して釣に行き三尾を獲たるのみ。近来雑魚繁殖少く、松川に於

ても魚の影を見ること稀なり。上伊那へは漁業組合にて琵琶湖より飛行機にて子鮎を持ち来り放流し、よくつれる由を聞く。

社会の今日 世は益々不安の度加はる。フーパー景気も一掃、独逸再苦境に入る。

【語句の説明】①口挽…一種類の収繭につき、解舒の難易、糸量と多寡、糸質の良否などを試験するため、原料荷口の繭から少量の試料を抽出して繰糸試験を行うこと。

②フーパー景気…六月のアメリカの戦債返済猶予（モラトリアム）の提議に対してフランス政府が異議を呈し、妥結が延引していた。加えてドイツを中心とする金融恐慌が発生し、モラトリアムの提案から触発された「フーパー景気」は終熄した。

七月十七日 金曜

晴。組合支所に行き青山と組合の事務打合せて後上飯す。組合にて塩沢誠一、木下仙治郎を呼び出してセリプレーンを説明し、器械繰糸の時代は既に来りたる事を告げたり。午前十一時上飯、出行す。牧内一來行し嫁の談あり。北原伊平の娘を候補者とせる旨を聞く。写真を貰ひては如何と話す。次に竜門寺和尚来行し、之と池田寿の東京移転に伴ひ布教伝道講返金未納に付如何なる手段をとるかに付相談せり。

次て原貞次郎来行し、明日開かるべき伊那社臨時總會に付て話あり。第三者なる県、部会、顧問の三者に役員の選考を一任し、其数指名等も全部一任し度き発言をなせる事を約せり。福住来行して請福講に付て説明を求め出席して講の状況を見る筈なりしも、魚釣に行く予定にて帰宅す〔後略〕。

受信 吉野福一

【語句の説明】セリプレーン…生糸の糸条班検査装置のこと。黒色平板の検査板に生糸を巻き、一定の方向から光線を当て、標準写真と対照しながら糸斑や節を検査する。

七月十八日 土曜

曇晴。直に銀行へ出勤す。来る廿二日の總會の用意せり。行員賞与金、宴会より行員増俸の件、支店成績優良賞へ至る迄全部計画して頭取に示す。午後一時より伊那社に臨時總會あり出席す。定款を今迄十七名の役員ありたるものを減員して理事七名監事三名とし、其定款を變更すべく臨時總會ありたるに付出席す。此の計画は元より予の画したる所にして、余り彼に喜はれざる計画なり。之を敢てしたるは、伊那社の存立を危からしめたるか為に、此より救ふ道なかりしによる。此の計画は余り人に好まれざる事なれば、先してなすはよろしからざりしなり。伊那社臨時總會は寧ろ解散説迄出てしが、遂に予定通り進行し、予は監事に挙げられたるも黙して散し、仙寿楼に於て懇親会あり。杉原課長も来りて会議に列し、宴会にも列す。此の事は予にとりて面白からざる結果を齎したり。此の如き点は利害を充分考ふべき事なり。平野の手先となりて働きたりと見做れたり。安達久作なる技師に臨時總會にて面会す。

予記 清水を伊那社長より蹴落す事に於ては成功したるも、予としては面白からざる結果を齎したり。利害を考へてなすべし。

七月十九日 日曜

曇雨。朝八時に金田投網を持ちて天龍へ遊に來り。予と共に松川下流にて投網を試む。二三尾を獲たるのみ。午前中、川を左右岸に試み

しも漁獲なし。正午中止して、弁天に河風に裸となりて青嵐を恣とす。組合より迎の使者来りて、横浜出発の話で午後組合行、専務及青山と彼は打合して口挽中の不在を委員に話して頼み置きけり。組合より午後八時十四分の八幡発の電車にて出発す。

総て急くの用なければ深慮の上断行するを要訣とす。熟慮断行は予のモットウとすべき事なり。

敏子来訪したれとも、夕刻帰片す。

午後八時十四分発にて八幡より江塚、青山と同伴して横浜行。丁度上郷、原唯一及櫛原と電車中同車して横浜へ行く。車窓雨降り乗客多し。三等車内に回りに行く。

発信 勤労党

七月二十日 月曜

雨。朝七時横浜かとかや旅館に着、投宿す。生糸市況悪しき為市中寂漠を極む。午前中間屋来訪し先つ湧川より店員来り、次に神栄の小菅氏来訪し市況の不況なるを聞く。先つ神栄へは不相変出荷する事とし、予は単独に安田支店宮崎を訪問して湧川の信用状況を聞合せたるに、最も悪し。店内に内証起り紛糾を極め、信用地に墜ちたりと。神栄の方は左程にてはなし。川口、石橋は相当に商業をなし居れりとの事なり。帰宿して青山、江塚と相談せしが、安心の行く程度に於て取引せはよろしからんと云ひしも、予は湧川の不信用を唱へ、心配して取引するの要なきを説きたり。併し安心して取引し得る事とせばよろしからんと相談まとなり、先つ神栄を訪問して三井物産へ売る事を契約し、三井物産を三人にて訪問し、出荷買入方を頼む。買入主任西川にも会ふ。吉田氏にも面会し、尚新井氏にも会し種々製糸上の新知識を

得たり。夕食は田舎家へ案内せられて食す。夜十時帰宿して寝に付く。

【語句の説明】川口：横浜の生糸問屋・川口商店のこと。川口正一を代表に一九三一年四月に創業した新興商店。翌年正月に成立した横浜生糸問屋業組合の組合員となっている。なお、神栄（神栄会社横浜支店）・湧川（湧川合名会社）・石橋（株式会社石橋商店）も同組合に加入している。

七月二十一日 火曜

雨。横浜かとかや旅館に朝七時、連日の疲労を医して起き出つ。例年なれば暑苦しきに本年はユカタ一枚にては寒し。シャツを下に着て漸く過す。先つ湧川を呼びよせて、当組合の安心して取引出来得る方法により取引すべしと申渡せしに、然らば日本生糸へ案内し三者合議の上すべしと。同人の案内にてへ行き、重役長峰、竹中支配人浦山支配人、稲田副支配人に面会し種々話して、直接日本生糸へ生糸を持ち込み日本生糸の手より直接代金の受渡をなす事、為替は三百円位をつける事等打合せ、月額二千斤乃至三千斤たる事。

日本生糸及湧川、石橋等と共に昼食を料理屋に喫し、宿へ帰る。予は原名の片山氏を訪問し、従来の取引を謝したり。片山氏は稍不満の如くなりし。次に大平ヒルに川口商店を訪い、特別の荷口あればそれを出荷してやるべしと話して後、午後上京す。江塚、青山の両人は残して、両人は生糸の検査に行けり。上京、駿台荘に入り休憩の後、山口英九郎氏に電話をかけて不在、伊原五郎兵衛の聖ルカ病院を訪問す。

予記 宿屋にて青山より組合出勤を促され、予の銀行の立場を話し、片桐事件終了後銀行を止めて帰組したき旨を話す。

【語句の説明】①日本生糸：日本生糸会社。一九二四年九月の横浜生糸解散時、同社の営業および有体財産が三菱商事株式会社によって新設された株式会社に譲渡され、その後三菱商事の子会社として日本生糸会社が成立。一九二〇年代後半、下伊那地方の生糸は神栄、湧川、日本生糸売込問屋を介して、日本生糸会社へと売込まれた。

②原合名：原合名株式会社。幕末期に生糸問屋の原商店を開設した原善三郎の婿養子・富太郎が合名会社に組織替えし、一九〇二年に三井から富岡・大嶮・四日市・名古屋の四製糸所の譲渡を受けて、製糸業を拡大。蚕種の無償配布、最新式器械の導入、養蚕組合の育成、直接取引など積極的な養蚕農家への指導と、優良原料繭の安定確保を図る経営を行ったが、人絹糸工業の発展や昭和恐慌の打撃をうけ、三十九年に片倉製糸紡績に合併された。

③聖ルカ病院：現在の東京都中央区にある聖路加国際病院。一九〇二年にアメリカ聖公会の宣教師であったルドルフ・トイスラーが、福祉事業を目的として創設。

④片桐事件：片桐亨次郎が前年の十二月に百十七銀行から担保金十九万円相当を盗んだ事件。この年、六月四日に懲役一年二カ月の判決が下された。

#### 七月二十二日 水曜

雨。朝八時飯田着。直に銀行に出頭す。惣会開かる、当日なればなり。金田支配人より先つ予か作製せし行員賞与金中二人の脱漏ありし由を聞き、第一に恐縮す。次に正午頃重役出行して重役会を開き、総会に臨み片桐事件を報告する事に付て打合せたり。片桐事件は、銀行として大なる信用上打撃を受けたるものと此事に付ては心配し居たる

に、案外思ふ通りに行きたり。午後一時総会を開き臨席す。当の片桐事件の責任者なれば恐縮の体にて臨む。決算、認定利益金処分案は予定通り通過し、終了して後、頭取より片桐事件につきて予定の通り詳細なる報告あり（始め伊藤氏より此の説明の要求ありしも後廻しとなし）たれば、別に異議も無く終了したり。終つて仙寿楼に於て宴会あり。課長級のみ宴会に列し、他は酒肴料を給して置けり。宴終りて直に帰宅す。家族打集ひて、東京の模様より毎日の雨天と冷気とを語り合ひたり。

社会の今日 連日の雨天と冷気にて米二三円以上となる。

#### 七月二十三日 木曜

晴。久し振りに雨上り、日の光見ゆ。未た水たまりある道を組合支所迄行く。他の役員不在なれば、製糸部口挽の模様及信用程度表作製の原案等につきて大体を見、清水より伊原キノの競売事件の状況等報告をうけたる後、思ひつくかま、に井深を呼びよせて龍東館始め神稲、河野等の組合視察に行く。先づ龍東館を訪問して其工場を見、次に河野を見たるに始めて河野組合を訪問したれば、武田組合長居合せて種々説明くれ、其の良好なる糸を見て参考となる。我組合の釜中の整理の悪しき事及透明度に迷はされて繰糸方針を変更したる事が大なる誤まりの基なりし事を覚る。最後に上郷組合を見て夕刻帰宅し、銀行へは病氣と称して行かず。終日組合の為に龍東の組合を視察して終る。父より銀行よりもらいたるものを見せよと迫られて、賞与金四百円の中所得税及附加税を金五十円出金す。尚椀屋との北河原田地の行違あり、国晴に売りしものを元へ戻してくれとの申込あり。猶、予の光治に対する冷酷なりとの話ありたり。

予記 自ら軽躁を戒む。耕地の予に対する悪評盛なり。銀行欠勤。

【語句の説明】①信用程度表…資産状態や借金の有無を調査した上で持株（出資額）の多少も考慮に加え組合員の信用程度を評決し、それを示したものを信用程度表と称した。

②龍東館…一九一七年、喬木村に設立された組合製糸工場。

七月二十四日 金曜

雨。雨に降りにて鬱陶敷く、米価のみ高騰す。朝組合支所に行きて午前中生糸の製造を見る。午後上飯、銀行に出勤す。昨日の欠勤にて仕事山積して、午後七時迄居合せて事務を完了して帰る。心落ち付かず。組合の用件と銀行の用件と交々来往す。清和会仙安に会開せられたるも、掛金十円小使をして持参せしめ欠席せり。金は太田寅三郎に渡せりと云ふ。〔中略〕松下来行し、大に犬の礼あり。松下へ犬の仔を贈りたるによる。宿三原屋木下の土地を分譲してもらい度く度々父の許へ頼みに来る。

夜七時より支所に於て現業員会を開き備表、糸条斑悪しきにより之を矯正すべく会議を開き、大方針を定粒を確守する事、釜中の整理をよくする事等を定めたり。之を重役に伝達すべく明日を期する事とせり。

【語句の説明】定粒…定粒繰糸のことか。繰糸過程において、一緒あたりの繭数を定めておき、常にその粒数を維持しながら繰糸を行う方法。

七月二十五日 土曜

晴曇。組合にて終日費ゆ。先つ支所に行きて次に本所に行く。正午

の休憩時を利用して生徒を集合せしめ、先つ専務より一場の話をなし、次に予は繰糸方針を定粒確守、釜中整理、主任の命を守る事等を話し、タガが緩弛して居た、今後は一層タガをしめてかゝるべき旨を告げたり。若し其上にても尚不成績のものは断るより外なしと告げたり。次に午後一時より信用評定委員会を開きて、対人信用200円を半額に減して百円とする、即ち総て対人信用を半減する事案を立て、委員会に臨みたり。竹村は高を減する案を呈出し置きて去りしも、予は衆議により大体方針を之に定めて賛成を得、之によりて進む事とし遂に決定し、逐人審査して決定額を得たり。次に午後六時半より支所に生徒を集めて本所と同様な講話をなし、能率系重、糸条斑共によき糸をとる方針を立て之を話せり。此の訓示によりて将来共大に緊張して仕事出来るならん。専務よりも話あり。井深よりも詳細なる話をなせり。

予記 今迄は透明度に重きを置き過ぎたり。之れにまよいて能率も工程もおくれたり。

【語句の説明】信用評定委員会…松尾村信用販売購買利用組合の信用部が行つた組合員への資金貸与に際して、貸与対象者の審査を行う委員会。一般に信用評定委員会では、組合員の人格、資産状態、持株数などを考慮して信用程度を評決するほか、信用程度表を年に一〜二回作成し、審査材料とした。

七月二十六日 日曜

曇雨。組合支所より本所に行き、終日番をなす。別に用事としてはなけれども、新聞を読み、往復文書を読み将来の対策を講し、此不況時代を如何に突破するかに付て心中研究を怠らざりしが、消極的に

勤儉力行あるのみと考へたり。之れが実行は毎日多忙に過し居れども、一般の民衆は暇多くして衣食にも窮するもの多く、民、菜色あり。政事最も恶劣なるも、之れを説破する政友会に人物なし。

七月二十七日 月曜

半曇半晴。組合より銀行に出頭す。種々行務を見居たるに、午後七時頃片桐来行し、又中原氏を呼びよせて、前橋に於ける軍人会の講習の件より勤労党の件につきて種々打合をなしたり。三人がチトセに入りて夕食を共にし、片桐氏より、加茂宮司が下久堅へ来りたる序を以て本学神社に参拝すべければ同行案内せられたしとの事に、諾して同行する事とし、加茂氏と八幡駅より同行する準備せり。次て種々話して散し十一時帰宅す。近来頭脳極めて散漫となり、夢心地の如き神経衰弱なり。

国事愈々艱難にして凶作の兆あり。不安愈々増すか如し。

在郷軍人が一般に御女郎の様になり、無節操にして媚を売るが如き態度は、時代相にもよるべけれども心見悪し。今の軍人会幹部皆然り。

【語句の説明】本学神社：国学の四天王を祀る神社。現在の高森町山吹にある。

七月二十八日 火曜

晴。靖国神社宮司加茂百樹氏が下久堅の郷社（最近村社より昇格）に来た序を以て本学神社へ参拝すると聞いて、今日は銀行を休み、役場の会計検査も午前中休んで、八幡駅に加茂氏の天龍峡ホテルより来るを要し、車中に面会して本学神社へ案内する旨を告げ、車中種々談して桜町駅着、下車。北原代議士、平沢、上郷村長、片桐寿等と会し、

自動車にて本学神社行。土地の有力者に迎へられて登山、予め用意せられたる敷物（見晴よい場所に）の上にて長蛇の如き天龍川を見る。

伊那の峽谷雄大なる景色なり。あかす眺めて暫く休憩して後参拝し、後神宝をとりよせて之を展覧に供し、加茂氏は祖先に会ふが如き態度にて拝観せり。予は役場の方に用事あれば、此の雅趣ある催を割きて十一時の自動車にて帰る。役場に出頭して石原と共に会計の検査をなす。午後二時半迄二時間行ふて小林善次郎の葬式に会葬してやる。義理ありて出頭し出棺前諸事を見る。埋葬して再び帰りて善次郎の冥福を祈りて帰り、再び上飯す。勤労党委員会あり出席したり（ダルマ屋）。田中清明より東京の共産公判に於ける示威ピラマキの話、検束の話あり。

党大会結党式を開く事に付、其準備に付ての話、前衛部を青年を以て作る話あり。併し中原の青年におもねる態度、予の既に容れられざる態度は不愉快なりし。十一時帰宅。善次郎は食道癌にて死す。元氣よき男なりしも惜い事をせり。

予記 銀行欠勤。

七月二十九日 水曜

晴。組合支所から役場へ出頭した。役場では会計検査を昨日から執行して、石原と共に村昭和五年度決算を検査した。問題は村長の特別費用弁償であつた。之れが予算より多く、費消する事は悪例を遺すものたと石原が主張した。以前の村長時代にはかくの如き例はなかつたと云ふた。予も之には同意であつた。又土木費の臨時部を見た。土木費は県査定額を多く配る為に種々の形式をとつたもので、実際のものとは全く異て居た。八幡駅喬木線の駅組合会の費用は、村費としては

九百円を消費したのみである事か明となつた。村道の件については石原は不平を有して居た。即ち八幡を中心とする道路のみであつて他の村道は出来ない、此の如き道路網は村の取るべきものではないと主張した。伊那社役員会も開かれたが、之には出席しなかつた。役員改選後の会長決定の役員会であつたが、夜仙寿楼に□□少佐、北原大尉の送別会と金子司令官の歓迎会が開かれて塩沢と一所に出席した。酒間に、山田は熊谷に表彰を当にするなど云ふたら彼は食つてか、つて来た。面白い男だ。久し振りに軍人連中と会して飲んだ。

予記 吉野帰省して(演習召集から)面会した。送別会の席にてボンゴザとなり、長沢と在郷軍人の宣戦第一となすべき任務如何と云事に付て論し、予は非戦論者を剽滅して国論を統一するに在りと告げたり。

【語句の説明】①八幡駅喬木線：八幡停車場喬木線。伊那八幡駅前から松尾村水城・寺所・新井を経て弁天橋に通じる村道。一九三〇年

一三二年にかけて改修された。三五年に県道となり、富田伊那八幡停車場線と呼ばれた。

②北原大尉：陸軍歩兵連隊第五十連隊(松本)所属、北原武夫大尉か。二九年五月から三一年八月まで飯田中学校で教練を担当した。

③金子司令官：金子因之(一八八三～一九四九)か。陸大二十三期。一九三一年陸軍少将、同年から澎湖島要塞司令官、三二年歩兵第十

旅団(善通寺)長、三三年予備役。

④ボンゴザ：益莫座。酒席の最後までで残る者の意。群馬県勢多郡、山梨県、長野県東筑摩郡の方言。

七月三十日 木曜

晴。朝等は浴衣一枚にては冷氣にて堪へず。凶作の兆ありと皆口々

に話し合ひ、前途不安をかこつ。直に銀行へ出勤して、「中略」預けたる公債及委任状等正木氏持参せり。野原弘一氏より電話を以て面会したき由申込ありたるを以て、春月にて福住善治、吉沢武夫等と会見せしに、個人の意見として内容を聴かれたしとて弘一より吉沢氏の工場経営賃借関係に付き話あり。銀行としての之が活殺は如何にすべきかとの問あり。予は銀行か喬木館活殺のカギを持ち居れり、重役会に話して決する旨答へて、縷々経過を話し合ひて帰行し、直に銀行としての態度を福住、吉沢を銀行へ召致して話し、銀行の態度は事業を履行せしめて徐々に入金を計るものなるも、次の二条件を具すとて、三万七千円の親戚加判を一層有功ならしむる事、不動産を入質して銀行へ出す事、年二千円の利子を以て一ヶ年を免する事等報し、午後七時帰宅。大島銀行の破産の由を聞く。大島銀行問題にて頭取と信産、伊那、仙安に会合。

【語句の説明】大島銀行の破産：大島銀行は一九〇〇年一月十六日、資本金七万円をもつて開業、一九年には資本金五〇万への増資を決議するなど順調な営業を行つていた。破産決定は三七年一月。大蔵省の金融統制に従つて銀行業務の廃止を決定、三月一日をもつて株式会社信産銀行へ業務を譲渡した。

七月三十一日 金曜

晴。組合に午前十一時迄居た。丸岡屋幸治か父の死亡の為組合脱退の相談があった。飯田町信用組合から小池か来た。試験場へ行つて糸の検査状況を見た。上飯した市瀬信産頭取、前沢伊那取締役と仙安に会合し、大島より中島前頭取、平沢武治郎氏か来て大島銀行の窮状を訴へ、一万五千円の金策を頼まれた。併しバランスの様子と現今の自

行の立場から御断りするより外なしとして、市瀬より断った。三行で一萬五千は多いか、それで将来の望はないと打つけた。予は之に満足した。前沢は黙して居た。大島の窮状よりは、之れか波及の如何に成行べきかに付て恐れたか、両氏は大影響はあるまいと云ふて居た。正午から午後四時頃迄か、つて大島を撃退した。取締役個人で千五百円宛を作つて此際に処すると云ふて帰つて行つた。気の毒にも哀れてあつた。中島氏が病軀を提けて来たのも哀れたが、平沢氏の火中へ投したのも哀れてあつた。

予記 夜組合本所て山本清次郎、塩沢岸雄、佐々木力雄、塩沢、木下サカへ四人の送別会をしてやつた。山本及塩沢喜四雄の両人は十ヶ年以上なので表彰してやつた。置時計一つを贈つた。

【語句の説明】市瀬信産頭取：株式会社信産銀行頭取・市瀬明のこと。信産銀行は一八九七年に飯田町に創設。市瀬は一九三六年から盛り上がった信産銀行・百十七銀行・伊那銀行の合併には否定的であつたが、三八年五月の南信倉庫空券事件（同一担保に発行された倉荷証券を三行が過当に貸出し損害を受けた）の責を負つて頭取を辞職した。跡を継いだ本田善四郎の周旋によつて三行は合併に至つた。

八月一日 土曜

晴曇。飛行機か沖の島へ来た。浜松の人鳴沢氏か浜松を中心として東京、名古屋、飯田等へ航空路を開くべく、着服して来郡し、沖島を着陸場として飛来し、村会議員、飯田町長等を招待して鱈の生魚を持参して大ブルマイをすると評判であつた。予も召待せられたか、銀行か忙はしいので行く事か出来なかつた。飛行機は午後、飯田付近の上空を三回計り飛んだ。銀行へ出勤したか、頭が悪いので吉川の総勘定、

本帳及為替取引に関して説明も余り分らなかつた。頭取に昨日の大島銀行問題、吉沢問題等につきて報告した。勤労党本部へ、鹿子木先生著書は支部から申込むからそれ迄待つてくれと葉書を出した。銀行から帰宅して頭を休めるべく釣に行つた。魚獲は一二尾に過なかつた。北原の息か遊に来て一泊した。頭か重く、午後になつて倦怠が愈々甚かつた。身体を横に保つにもうかつた。

予記 種々な事柄か次から次へ湧いて考へられた。作興会、伊那社、銀行、組合、勤労党等、常に考へさせらるゝ、事の多かつた。

発信 井篋節三、万葉志宴の断り。川口正一、贈品の礼。陽松軒、暑中見舞。

受信 津山寅藏、吉田初治郎、田代竹司、小松義治、伊原五郎兵衛、下田文一、北吟吉、秦少将、暑中見舞。飛行機沖の島より飛ぶ。

【語句の説明】①沖の島：天竜川沿いの松尾村大字明〔新井〕川原にある地名。

②万葉志：井篋節三が井乃香樹の別名で刊行した『万葉志』（万葉志刊行所、一九三二年）のことを指す。井篋は石田友治主幹『文化運動』に頻繁に執筆活動を行い、名古屋で文化講座を主催していた。

後に日本主義に傾倒。

八月二日 日曜

晴曇雨。午前中家居して手紙をかき、暑中伺等を出す。暑気少くして真夏の心地せず。午後に至りて組合支所へ行きたるに、増沢の降旗来訪し話す。工程六、七本を出てす。操糸規約改正の結果、セリブレーンに重きを置く結果なるべし。夕刻迄組合に居りて帰宅せり。山本父来訪して話したり。久し振にて来訪し種々の話あり、父は之を接



待せり。升屋より照子の病氣床祝を持参せり。近來心に情氣を生し、万事ものうし。殊に読書力減退し、新聞等も読むにものうし。世態不安の氣に滿ち革命の兆あり。徒に不満、不平の心のみつりつゝあるもの、如し。此の如き時は黙して長養し、有事の時に備ふべきものなり。

社会の今日 県議戦（選）の記事、新聞にやかまし。

【語句の説明】 県議戦（選）：九月二一日鳥取に始まり一〇月一四日静岡に至る府県會議員選挙。前回（一九二七年）での大勝による優位を維持しようとする野党政友会と、内相安達謙蔵指揮のもと議席奪回を目指す民政党とが争った。

八月三日 月曜

晴。今年暑中の第一日のみよく晴れ暑氣増し真夏の如し。銀行へ出勤せしに午前中にて終り、正午退出して組合本所に開かれたる役員会に出席す。横浜出張生糸売込の報告をなす。予は神榮、湧川を経て三井、日本生糸の両店へ出荷する旨を告げたり。青山、江塚よりは技術問題に付話し、蚕品種規画統一に対しては十二日頃製糸部委員会を開きて相談する事とせり。横浜より石橋次郎八来訪し、種々話をなす。鳥清へ案内して夕食を喫し、彼を飯田迄送りて後、中原宅を訪問し「日本精神の哲学」を配布、講読する事に付て北村を頼む事、三百部を購読する事及今村氏著書「訓練所の研究」に対する補助金問題に付中原より頼まれたり、予は愛国勤労党立党の趣意書を作り、之を天下に発表して其の批評を乞ひ、天下有識の士を集めて立党すべき事を話す。即ち既政党、社民党、ファツシヨ党、共産党等と異なる点を述べ、日本の現状より合法的に進む為には是非共之による外なき事を天下に

訴へるべく話せり。中原も大に了として、近く天下に訴るべく約して辞す。

【語句の説明】 ①「日本精神の哲学」：鹿子木員信の著書（直日のむすび出版部、一九三二年）。三〇年八月に荘内で行われた行地社主催の夏期講演での日本哲学の講義が元となっている。

②「訓練所の研究」：今村良夫著『全国優良訓練所の展望』（直日のむすび出版部、一九三一年）のことを指すか。伊那郡川路青年訓練所指導員でもあった今村が全国の青年訓練所の経営方針や綱要、事蹟などをまとめている。

③愛国勤労党立党の趣意書：実際の趣意書には、「資本主義の傀儡たる特権政党の腐敗跳梁」や共産党・社民党の指導原理の「非日本的」なることに対して批判が加えられている。『中原謹司文書』（憲政資料室所蔵）所収。

八月四日 火曜

曇。銀行へ出勤す。松江大元居士来行して、松本和合氏の接心会に出席すべく話あり。予も神經衰弱症を治すべく同行したけれど、同行するを得ず。殊に大島銀行支払停止事件あり、其影響如何になるべきかに付心配なれば離る、事を得ず。去りとして又家庭に於ても、父は数年前より富士五湖回遊を試み度由計画し居り、信也、尚夫を同伴して行く事に決したれば、不在中他出する事も出来ず。遂に郡内の財界の状況を慮りつゝあり、商業會議所の斡旋にて新聞記者を召し伊那Bを招きて相談したり。父、信也、尚夫、富士五湖回遊の仕度をなす。天氣都合悪しく曇天多ければ余り勧告はせざりしも、父の発念止め難く、明朝出発する事とせり。

八月五日 水曜

曇、小雨。父と信也と尚夫の三人か、父の年来の宿望で富士五湖周遊に出かけるので、朝四時から起き出て、仕度をして居る。用意が出来て出発するので、起き出て見送った。天は雲の流れが早く、暴風雨を思はせる天候である。無事に旅行を終へる事を願ふて家内へ入った。また朝早いので再び床に入ったか、既に百姓のものは起き出て車を挽いて歩くものか多かつた。組合から銀行へ行つた。銀行に就ては青山も心配してくれた。商売は予の性格には合はないものであつた。面白くもなく、毎日虚言で固めた商売に出る事は苦痛する処であつた。併し親の脛を何時迄もかちつて居る事も出来ないもので上飯して銀行にとめた。

「日本精神の哲学」、其他国本等、読む暇もなかつた。読むにしても頭が悪くて読むに従て頭脳から失せた。

受信 牛草勇、今村仁造、玉置勝人、以上暑中伺。

八月六日 木曜

曇雨。上飯。聯合事務所へ行きて作興会思想史の決算を下田を相手としてなす。残本百七十部あり。之に対して九百円の負債あり。如何にして之を銷却するかと迷ひたるも、曾て其の発刊に際して予は会に迷惑をかけずと公言したる手前として、之を引受けざるべからざる破目になる。後銀行へ出勤し、午後三時より重役会を開き、太田実三辞任に付之を受理するや否やに付之を諮り受理と決し、吉川氏の公債を売りたるに付不満あり、銀行が目下沈浮の岐路にある事より実に重大なる時にあるを述べ、頭取も亦之に付て悲観説を述べ愈々悲観の度を増すか如し。依て予は樂觀説を述べて気楽を装ふ。夕食を共にして重

役会を終る。午後九時帰宅す。父、信也、尚夫、三人して富士五湖周遊に出かけ家族少し。宏は山本父に伴ひて山本行て泊つて帰らなかつた。大雄寺の施餓鬼には母か参拝に出かけた。毎年此頃は最も暑い日であつたか、今日は冷涼である。庭には伊那公か来て松を手入して居た。

発信 今村良夫(受信)。昇身(進)の運動を依頼された。

【語句の説明】①作興会思想史：一九二四年十月二十六日に創設され

た下伊那国民精神作興会が頒布した市村威人著『伊那尊王思想史』

(下伊那国民精神作興会、一九二九年)を指す。

②大雄寺の施餓鬼：施餓鬼とは仏語で、餓鬼道におちて飢餓に苦しむ亡者(餓鬼)に飲食物を施す意。無縁の亡者のために催す読経や供養のこと。ここでは、現・飯田市大王路の臨濟宗妙心寺派の大雄寺で行われたものを指す。

八月七日 金曜

晴。暑中らしい暑気となる。組合支所にて青山と事務の打合をなして後、上飯す。銀行其の預金か毎日近來一日二万円宛減し、借入金をしてしては到底補ふ能はざるを知る。危き事累卵の如し。毎日のバランスを見る度毎によき心地せず。頭取策の施すなきを見て茫然たるのみ。予も銀行業を真に予の使命として行ふの勇氣もなく、その日／＼を送るのみ。居眠の常務の名を勝ち得たるのみ。一日も早く銀行を何とかして逃げ出す勘考のみせしも口実の得べきものなく、毎日銀行と組合を両方に見て過すのみ。放課後に入りて\*\*の使者として佐々木銀次郎来訪し、約束の金百円を持参せるやを問ひしに、持参せず、前の勘定を持ち来り、明細を見たしと云ふ。予は彼か其の屋賃は全負債

に対する利子なるや否やを詰問せるに及んで怒り、此の如き約束を破るものとは破約なる旨を告ぐ。彼も亦怒り卓を叩いて大声にて立廻らんとし、遂に金田来り中に入りて事なきを得たり。癪に障れる事甚し。遂に\*\*問題は之にて中止となる。帰宅して気持悪ければ釣に行く。福住来行して又彼と吉沢問題に付て話す。

予記 郡農会にて政府払下米を周旋したる為、飯田相場下落し十五円を破りたり。カドヤへ電話したるも十四円二十銭位より買はず。松岡屋もダメなり。

発信 岡原聯隊長。今村昇任の運動。今村良夫。  
受信 島岡三造、暑中伺。大平友美。

【語句の説明】①松岡屋：伝馬町二丁目にあつた醤油・味噌醸造業者。

この時期松岡屋の経営は停滞しており、多くの負債を抱えていた。

②岡原聯隊長：岡原寛（一八八〇〜？）か。陸士十四期。八月一日より歩兵第五十連隊長（一九三〇〜三三年）。

八月八日 土曜

晴。組合支所から正午上飯、銀行へ出勤す。組合では青山専務がボテ連中と屑物の売りを交渉した。上久堅出身のボテ連中であるので、吉川県議が下久堅以東秋葉街道を改築した功を賞し、是非共県議に再選出を称して居た。放課後前沢明文を蕉梧堂に招いて、吉川県議の事から銀行業の将来に就て話し、地方銀行の将来は既に前途は明となつたと話し、此際市瀬信産の意中を忖度して大合同の実現に一歩をふみ出さんかと話進み、予は百十七銀行の重役は説服して此大合同に就ては賛成せしむべしと話し、前沢も地方銀行の合同は必然の帰趨なる事を話し、両者意見の一致を見たるにより、信産を動かして大合同実現

したき由話して午後九時蕉梧堂を辞して帰る。

山本へ宏数日間遊に行きしに、其の同伴して央、トサの両名来遊せり。父及信也、尚夫、富士五湖周遊より上高地へ回りたる由電報着せり。銀行の危機を救ふべく計画たる第一日なり。此日は八の日にて吉日なれば、予想外に発展するなるべし。若し合同出来得れば、市瀬信産を頭取として進むも可なる由を申したり。

発信 王置勝人、牛草勇、今村仁造、暑中見舞返。

【語句の説明】①ボテ連中：ぼてとは、その日稼ぎの行商人が商売物を入れて天秤棒でかつぐ籠や桶。籠を持って商売をする連中のことを指す。

②吉川県議：県会議員の吉川亮夫。当時、松尾村長も務めていた。

③秋葉街道：松尾村を起点として、伊那山脈を越えて静岡県境に至り、秋葉信仰の拠点である静岡県の秋葉山へと向かう街道。

八月九日 日曜

晴。山本から央と土佐の子供か来て居るので、之に引かされて其他の私用の為に家居して午前十時迄居た。晴男母七日死亡し、其見舞として午前中訪問した処、蚕多忙の時なので十七日葬儀を行ふ由を聞いた。午前十時半頃組合本所に出頭した。田中句一郎か居合せて種々組合の事から横浜生糸売込の話をした。青山もやって来て種々話した。川口へ生糸を出荷すると聞いて其の否を話した。頼まれたと云ふてそんなに諸問屋へ糸を出荷するのはよろしくないと告げた。又井深も来て解紵糸長、原料繭の解紵能率と点数、工程の関係を統計的に計算し、毎年度の原料とセリブレン関係に付て研究せしむる事となした。午後六時迄を計て帰宅した。普及社から宮沢某が其の新発明の繰糸機を

売りに来た。又組合製糸研究社から組合製糸販売方法及配分率の順位の印刷物を売りに来た。

釣に行つた。十四五尾を獲た。銀行の資金問題に付ては常に念頭を離れなかつた。父及信也、尚夫が午後五時帰宅した。

予記 地震。夜中十二時地震あり、安眠を破る。人民の弛緩に天神地祇怒り給ひ、時に警告を發し給ふも日本人未だ醒めず。

【語句の説明】①解紵糸長：解紵とは、繭から繭糸をほぐし出すこと。

解紵糸長とは繭一粒の平均糸長。繰糸供用繭八粒付定粒繰糸法で繰糸し、繰糸して得た生糸の長さで繰糸供用繭粒数とから繭一粒の平均糸長を算出する。

②原料繭の解紵能率：繭解紵の良否すなわち繭糸が繰糸の途中で切断し落緒した回数数を表すもので、一定粒数の繰糸を行った際の接緒回数で繰糸供用繭粒数を除し百を乗じて求める。

③普及社：保証責任信用販売利用組合普及社のこと。長野県松本市の養蚕農家を主体とする蚕種消毒普及会の内の有志が、一九一七年に組合製糸の開始を企図し、龍水社（保証責任伊那生糸信用販売組合連合会）を範に、保証責任の産業組合として認可を受けた。二五年頃には、区域は松本市、長野市外七郡下一一五ヶ町村に渡り、二千名以上の組合員がいた。

④組合製糸研究社：昭和初期、長野県に存在した製糸関係の出版社。

八月十日 月曜

晴曇。組合支所から銀行に出た。青山に事務を打合して後、上飯した。銀行が支払停止をするか否かの岐路に立つて居た。金田は多少の余裕のある間に支停をするの有利なるを説き、頭取も其説に賛して実

に重大なる場面を演出した。併し予は、将来の事から其他関係事項を考へて躊躇せざるを得なかつた。金田と予と大平の胸中には、一種沈痛な黙々の時間か過ぎた。今日夜にもなつて重役会、支店長会、大株主会と矢つき早に開いて支停を一般に公告し、大問題か下伊那の財界に及ほすべき一殺那であつた。併し兎に角一考すると云ふので止んだ。間髪を容れなかつた。然るに午後松沢か来行して、組合に供給すべき夏蚕資金が出ると云ふので、其振込が来る事となつたので、更生の心地かして兎に角当分の間は之によりて銀行の生命か延びた。危険なる日であつた。

八月十一日 火曜

曇、小雨。銀行へ出勤した。自分乍ら大局の見えぬのにあきれた。銀行へ入つた時、吉野から銀行等へ入るのは止めたらどうだと忠告してくれたのか未だ耳底に残つて居る。止めるに止められん今日の境遇、進退谷〔極〕まつて居る。今日伊那社に岡村の主催の伊那社役員会かあると聞いたので、組合へ電話で青山に問合せた。青山は予に其報告をしなかつた。又工場懇談会のある事も予に報告かなかつた。稍之に付て予も平てはなかつたか、青山か行くと云ふから青山に一任して置いた。銀行へ中原と座光寺と来訪して、中原か県会議員に出ると云ふて其の用意の為西川と合同して新聞を出すと云ふ話かあつた。それで其の記者として荒井勝三郎を県議戦の済む迄頼む事の相談かあつたので之を承諾した。又予は中原に県議等に出るよりは進んで次の国会選挙に出たらどうだと忠告した。中原も考へたが、座光寺は目下の場合、青年が中原か県議に出る勢を挫くのはよくないと挿んだ。兎に角は百事を約して去つた。山口氏か銀行へ来た。午後六時迄銀行業務を執筆

して帰宅した。

予記 頭の中には産組と銀行、青山に対する考等コンガラかつて居た。  
発信 島岡三造、市瀬泰一、暑中伺。

受信 新井勝三郎、綾川武治、増田一悦、小原真一郎、小松義治、暑中伺。

八月十二日 水曜

曇、夜雨。銀行を休みて午前中より組合支所行、青山と共に聯合事務所に於て開かれたる養蚕組合組織に関する下伊那産業部会、郡農会及養蚕同業組合の主催にかゝる懇談会に出席す。県より役人来りて右法規の説明をなす。組合よりは予、青山、江塚、吉川及市瀬書記出頭す。午前中法規の説明ありて、青山と予は午後は止めて帰る。組合支所に於て製糸部委員会を開き、規畫統一に関する件に付て協議し、秋蚕種代は夏蚕種に準し組合にて交渉希望者には其交渉代金を以て立換支払ふ事に決せり。猶生糸検査規則、明年一月一日より国之検査となる事等話し、又生糸販売に関して報告をなせり。規畫統一に関しては、真に奨励品種を定めるには種類多きに過ぐる旨を語りたる説あり。参考になす足る。帰宅して胸裡の鬱を暁らす為に釣に行く。絶好の日なりしも魚の釣れるもの少し。

銀行問題胸に充ち、進まんか退かんか如何にすべきかまよふ。退くとすれば如何にして辞したらばよきか、辞するならば早きをよしとす。

【語句の説明】生糸検査規則…輸出生糸検査規則のこと。一九二六年三月に農林省が制定。三一年に改正され、三二年一月一日から生糸検査を「公ノ機関ニ於テ統一的二検査シ其ノ成績ニ依リ取引スル」

と定めた。

八月十三日 木曜

晴。組合支所から上飯して銀行へ出勤した。銀行業の悲況に付て頭取の決心をたゞした。頭取は全私財を提供すると云ふと冥目して居たか、転身の術を講ずる事をしなかつた。之れか予の尤も物不足を感じる点であつて、彼と共に仕事をやる気にはなれない点である。帰宅して釣に行つた。

八月十四日 金曜

晴。漸く夏らしい日となつた。暑氣90度位を保つたが、米価は騰貴する一方であつた。今頃の照込みは米作には見直す事は出来なからう。沖の島から飛行機か乗客を乗せて空上を常に往来した。

新盆見舞として明河原から吉本屋、村沢へ行き、次に銀行に出勤した。組合本所へも夏繭の受入情況を見に行つた。銀行終つて西上柳に新盆見舞に行つた。昇平か神戸から返つて居た。足代少佐、北原大尉、村手中学校長等が退飯の挨拶に来た。西上柳と母と一所になつて方広〔峰高〕寺に上柳の墓参をして帰つた。夏繭は一貫目上伊那地方は三円五十錢以上を報して来た。

【語句の説明】①米価は騰貴…この年は日照不足と低気温のため稲作の不作が予想され米価が上がつていた。農林省発表によれば、八月十五日時点での作柄は「稍々不良」であつた。

②村手中学校長…村手鼎飯田中学校教頭か。一九二三年七月に英語教師として飯田中学校に赴任、三一年七月二四日に他校への転出が決定した。

③方広寺：知恩院の末寺で、現在の飯田市松尾町四丁目にある峰高寺のこと。

八月十五日 土曜

晴。組合支所に夏蚕繭受人状況を視察した。僅に二百六十貫を受入したのみであつた。木下千之助も来組して居た。吉川亮夫氏の県議出陣の話もあつたか、勧誘する等の態度はとりたくない。寧ろやめる立場であるのであつたか、併しそれは口外すべき事ではなかつた。銀行へ出勤した。金田から大平頭取の決意と其悲壮な位置とに付金田も大に困難して居た。

上柳昇平が訪問して来た。昇平の話によれば、還元絹も出来るも、又人絹の利用が増て天然絹糸の領域を冒して来て、将来蚕糸業に付ても大に考慮せなくてはならぬ立場にある由を聞いた。天然絹糸業の衰滅、之れは農村の重大問題であるのみならず、日本の興国の大問題であると考へた。目下の外交の不安、幣原外交の退讓的問題等に至つては憂国の情禁する能はず。併し国内の人心の微なるを見れば、国力の退嬰上止むへからざる事ならんも、此の退嬰疲困の国民に生氣を加へるものは外交の緊張より外はない。愛勤党問題も国民精神作興問題も脳裡より離れんけれども、此の退嬰、疲弊の人民を如何にすへきかを考ふる時いやになつた。

予記 上柳昇平と大平と三人で仙安で昼食を共にした。夜、吉郎平の処て葬式の相談があつた。川上、佐々木良の二人来訪し借金申込みありたるも断る。

発信 伊藤岩次郎

【語句の説明】①還元絹：加水分解、酸化、熱分解、バクテリア分解

等を経てフェーリング溶液などで還元された纖維素を原料として製造された人造絹糸。

②人絹の利用：昭和初期、人絹織物の一般的普及と共に人絹工業が世界的にその重要性を認められた。日本において、人造絹糸の生産高は累年著しい発達を遂げ、一九三〇年度の生産総額は約三千六百万ポンドに達し世界における有数の人絹生産国となつた。そのため、日本の天然生糸輸出は減少し始めた。

八月十六日 日曜

晴曇、小雨。銀行も休み組合も出頭せずして、終日意の儘に家居して悠々自適す。下男をして吉郎平の葬式の仕度に行かす。伴野より女兒三人来訪す。山本のタユも其一人なり。飛行機を見物の為来訪したるなり。信也、尚夫皆家居して一家団欒を味ふ。午後小雨あり。釣に行く。釣人多くして漁獲少し。吉郎平の葬式は組合のものを分ちて便儀、買物等に行けり。鹿子木博士著「日本精神と独逸精神」を読む。憂国の文字なり。之を通して哲学的の先生の所論は味ふべし。

【語句の説明】「日本精神と独逸精神」：『やまとこゝろと独乙精神』（前述）のことか。

八月十七日 月曜

晴。銀行支払停止したる文字、新聞紙上に現れたる悪夢に襲はれて目を醒す。冷汗にうなされ居たり。夢にして幸なりしと醒めて喜ぶ。頭重し。「中略」銀行を休みて吉郎平方に葬式に行く。終日帳場に坐して記帳せり。場を弁天松森の東端に猪佐雄のペテン的強請によりて貸せり。葬式終りて上飯、「中略」大阪朝日新聞の映画を見て帰る。

此日頭重き日なり。

【語句の説明】大阪朝日新聞の映画：朝日新聞は内外の時事に関するフィルムを集め、昭和に入り毎週一本ずつ新しいフィルムを製作し、これを「アサヒ週報」として全国で上映した。ニュース映画「アサヒ週報」はその後「アサヒユニバーサルニュース」、一九三二年には「朝日世界ニュース」と改称される。

八月十八日 火曜

晴。組合より銀行、云はは毎日のコースである。六千余貫夏蚕入繭せり。中津川銀行支払停止せる旨を聞く。業務終了後、頭取と小林暢を訪問し地方銀行合併促進運動をなさしむべく、彼の努力を請ふべく長野行を逡巡せり。併して事難くて始めて頭取のヘコの弱きを感じしむ。頭取の心配も察して余りあり。

発信 羽田同志争議へ激励打電。アクマテフォンバレ。

【語句の説明】①中津川銀行支払停止：岐阜県中津川町中津川銀行（資本金百万）は八月十七日の朝、突如支払停止を発表し、西筑摩郡南部の信用組合など地方財界に影響を与えた。

②小林暢：一八七九～一九三五年。一九〇三年より六十三銀行取締役、二一年同銀行頭取。三一年に同銀行と第十九銀行が合併して誕生した八十二銀行の初代頭取となる。

③地方銀行合併促進運動：一九二八年一月一日に施行された銀行法により、銀行資格（最低資本金百万円を有する株式会社）を満たさない地方の弱小銀行は五年間の猶予のもと他行との合併が進められていた。

④ヘコ：「ヘコが弱い」で、度胸がない・臆病であることを意味する。

同地の方言。

⑤羽田同志争議：東京羽田の羽田コンクリート会社の工場で、不当解雇を理由に従業員らが八月十四日より船上でのハンガーストライキを敢行。十五日に検挙されていた。

八月十九日 水曜

晴。組合支所より銀行に出勤す。毎日の銀行を如何にして脱却するか付頭を悩す事多し。父に話すも得ず、又他の人には猶更話し得ず。頭をなやます事多し。併し一日早ければ一日も早き方よしと決心して、来るべき重役会に打開けて話し、何とかして暇を得んと焦慮せり。一方産業組合によりて活路を開かんとして苦慮せしも、退いて我身の同情者も鮮き事を考へて、寧ろ引退して善根を養ふにしかずとも考へたり。銀行には金田腹痛にて出勤せず。又店頭も極て閑散なり。頭取、金田の看病して午後出勤せり〔後略〕。

頭取と放課後話せり。之れは合併促進を小林に運動する件に付何とかして促進をたのみたり。南信新聞重役会ありて仙寿楼にて松下、林等も会し、記者をして活を入れ俸給を減し新聞記事を精練する事を話せり。予の理想としては記者を全部代へる事なり。

予記 苦慮を続ける日。

【語句の説明】①善根：善根とは諸善を生み出す根本となるもの。無貧・無しん・無痴をいい、これを三善根という。また、善い果報を招くと思われる善の業因をいう。

八月二十日 木曜

晴。組合支所に行つて青山と話して、銀行から退く事に付吉川芳太

郎等も不賛成を説くから、機会ありし時予が組合に立帰り銀行を退き得る様運動を頼みたり。伊那社役員会に出席す。会長、副会長を決すべき日なり。此日欠席者、羽生、平野の二名。午前中は空しく費へ、午後になりて漸く顧問をも頼みて会議を開き、顧問及監事の予と原と川上、木下の選考委員の下に、木下を会長とし大平を副会長とする事を詮考したり。木下固辞して受けず。ムリヤリに詮考して後、姫城館に夕食会を開きたるも欠席す。銀行へは午後三時過出勤す。金田、急性胃腸カタルにて出勤せず。吉沢武夫来訪して、負債に関し小野商店よりの問合を如何にすべきか等の話と、吉沢本家との間の話あり。勤労党発会式準備会に出席す。青年の農村不況打開策に関して、目下の不況は生産夥多症なれば消費を多くする事、兌換券増発によりて（日本銀行兌換制度拡張により）平価切下と同様の効果を修めんとする井上蔵相の肚、之れはよろしからん。

農村不況対策としては、多角形農業により自給自足、養蚕偏重を戒むる事、等を説く。一般青年か共産主義的にして資本主義を呪ふの意は強く、余か銀行家としての呪と重なる様に思はれ不快なり。

【語句の説明】日本銀行兌換制度拡張：日本銀行は、未払込株金を株主から徴取することで増資を実行し、日本銀行券（兌換券）の保証準備発行制限の拡張を進めていた。

八月二十一日 金曜

晴。組合支所を見廻つて上飯。（中略）大平頭取は小林暢訪問の爲出県した。午前十時半出勤して吉沢秀雄に対し、銀行から仮差押をした事に付て父より赫怒を買ふたと話した。之れは退銀の第一であつた。午後になつて吉沢か出行した。武雄も借金に迷ふて居た。行務を見て

後、中原より会見の申込かあつたか帰つた。テンカラに出た。数十尾釣りに帰つた。

浅間山は貫火して気を吐いた。雨は少しも降らず、桑の茂は止まり稲作は持ち直した様であつたが、併し此の作柄は善くはあるまいと思ふ。天も怒り地も凶作を伝ふ。青年の意思も不安の為共産的であり、吾々の祖国の擁護派は却て遠けられる有様である。

県議戦（選）も迫つたが立候補難である。世事一転は止むを得まい。受信 親泊

社会の今日 恩給法改正に軍部と他と内訌あり。

【語句の説明】①浅間山：八月二十日の朝、浅間山に大きな噴火があつた。この年の六月以降、浅間山は頻繁に噴火している。

②恩給法改正：一九二三年四月十四日に公布された恩給法について、三一年に総理大臣を議長とする臨時行政財政審議會で恩給の受領要件を強化することを含む改正案が審査され、同案は八月二十日閣議を通過した。この過程で、軍部は軍人に対する在職年限の延長と年金恩給の割合調整、納金の新設に反対し、結局在職年限の延長を軽減する形で政府との妥協が成立した。

八月二十二日 土曜

晴。組合より銀行、勤労党等に顔出したり。各方面へ手を出し集取すべからざる状態なり。

水野龍介より次の和歌をよみ贈り来る。以て彼の憂国の心を知るべし。

工場の窓ゆふきいる、真夏日の そよかせほりつ けふもすぐしぬ  
すくよかに身をたもちつ、真夏日の そよかせあひつ、 はたらく



たぬしき

安からぬ世にあひつゝ、もわか目方 一貫あまり ふえしそくしき  
近々に身はふとれともすめくに、 つくす力の とほしくありけり  
之に對して返歌。

くれほしき事のみ多きこのころを かひなさずりて むなしく過ぐ  
す

【語句の説明】 水野龍介：原理日本社誌友。一九二八年八月に原理日  
本社主宰の蓑田胸喜とともに飯田に講演に來訪した。

八月二十三日 日曜

晴。鮎釣に行きたいと考へつゝも、暇もなければ組合に出勤し本所  
に行く。湯沢某なる蚕種家來組し、組合員伊藤某を売込人として蚕種  
を売込ましめありしが、組合にても伊藤に対しては貸金あり、蚕種売  
上手数料を以て差引く事に話ありたれば、此事に付て蚕種家と伊藤と  
組合との間に折衝ありて之れを解決したり。余り外交は上手ならずと  
予は自ら考へたり。午後五時、釣に行かんとして帰宅したれども、丁  
度牧内忠雄暑中休暇にて帰省し來訪したれば、之と面接して海軍部内  
に於ける狀況に付て語りたり。ダルマ屋の事務所へは行かずして終る。  
組合も不愉快なる事あれども、又組合員の純真なるにホダサレたり。

八月二十四日 月曜

曇晴。雨降らざる事数十日、雨を乞ふ事久しけれども降らず。残暑  
甚し。組合支所、銀行へ出頭す。銀行へは出勤するも何となく物憂く、  
何とかして辞する事を得ざるやと考へたり。併も是迄深入しては逃げ  
られず四苦八苦するのみなり。意を決して頭取に話し、明日の重役会

にも話して了解を得べく決心せり。放課後ダルマ屋の二階にて勤労党  
の連中か集まりたる席にて、座光寺に向ひ、予は中原が県議戦〔選〕  
に立つは不得策と思ふ事、他に自ら金を出してやる者あれば幸なり、  
若し無しとせば中原より仕方なからん、又予は党の費用として兎に角  
二百円を出金すべし、但し此内には粥川氏の分迄も含む旨を告げたり。  
市瀬、岡田來り居り、松本司令部に於て県下十ヶ所位にて国防講演を  
なすに付來松せよとの指令に付判断せり。軍人会の連中と話し、仙寿  
楼に於ける清和会に出席せり。九時自動車にて帰宅せり。勤労党に於  
ては中原県議戦〔選〕に出陣せしむる事は青年の間に熾なるも、中老  
のもの間では国会戦〔選〕に出て、県議戦〔選〕見合の意見多し。  
且又本人も之を希望し居るもの、如し。予も同意見なれども、青年の  
希望もだし難く、他に物色すれどもなし。予はブル階級と云ふ点より  
出來ず、出てさる決心なり。

【語句の説明】 松本司令部：松本連隊区司令部のこと。徴兵検査や召  
集、在郷軍人の把握のために設置された。長野県は一九〇七〜二五  
年までは飯田に連隊区司令部が置かれていたが、二五年以降、第五  
十連隊の松本連隊区司令部の管轄下となった。

八月二十五日 火曜

曇、小雨。上飯。(中略) 木下春雄息二才にして夭死し之れか葬式  
ありたれば弔問す。後銀行へ出勤したるに頭取出勤したれば、種々頭  
取と打合の上、家事上の都合にて最早常務として日勤出來されは可然  
勘考せられたしと告げたり。頭取も之には困りたるもの、如くなりし  
も、それは困ると言ひたり。取締役会を開きたるも吉川、上柳両氏欠  
席の為流会となる。福住の嬰兒死亡し、其の見舞として夕刻福住を訪

ふて帰る。銀行、勤労党、国民精神作興会、其他の件につき頭の中は混乱せり。病と称して欠勤するより外なし。  
発信 北原小石。嫁談に付て。

八月二十六日 水曜

晴。暑甚。昨日の曇天にひきかへて暑氣一層強し。組合より銀行出勤す。午後六時鹿子木先生、中谷、神永等と来飯す。勤労党発会式講演に臨むべく来飯せられたるなり。駅頭に出迎ふ。中谷、神永随行し来る。直に吉野館へ送り込む。鹿子木先生厳格なる態度なり。併して黨員の青年を集めて坐談会を食後開きて談するに、吾等の考へ方と先生の考へ方とは一致する所あり。即ち国家本位である事、階級斗争を認めざる事等なれども、哲学的の説明に至りては予の考へ方は観念的なり。青年の考へ方に至りては寧ろ多分にマルクス主義を含みて大なる軒輊あり。青年も先生の説には一驚を喫し、論争するものなくて唯々として敬聴するのみ。座光寺より主義、綱領に付て説明を求め又既成政党と吾党との根本差異に付て問ひ、先生之に答へ、吉野、マルクス流の迂遠なる質問を試み先生の一驚を買ひ、根本的に吾等の説はチガフ旨を誥されたり。十一時迄話し先生を伴ひて来り、鹿子木先生一泊す。

予記 暑氣甚しく頭痛する程なり。

八月二十七日 木曜

晴。暑。暑氣甚し。朝坐敷に鹿子木博士を客として父と話す。先生の神社中心主義は、既に吾が父か之を十数年前に実行して自治体の成績を上げたり。其の自治の機構に関する小冊子を先生に贈る。先生を

案内して弁天堤防より橋を渡りて伊久間の眺望よき処より対岸飯田松尾方面を見る。帰りて茶を喫し、大塩中斎等の書幅を取り出して見せ何か揮毫を頼まんとし居たる処へ、粥川に案内せられて中谷、神永両氏来訪し、共に携へて天竜峡を案内す。先生は旅行に疲労し居られたれは、湯に入りて広間に寝ころひて種々話せり。中谷も亦種々カラカイつ、も話せり。午後四時飯田に帰着し、吉野館別館に憩ふ。郊戸神社に愛国勤労党結成宣誓式を挙げ、午後三時の予定が午後六時となり、郊戸神社前に於ける宣誓式にも立合へり。途中立ち上るものもありて失態なり。事務万端未熟なり。午後七時より結党大会開かれ（飯田劇場にて）、君か代の合唱より経過報告（座光寺）等あり。午後八時より政談演舌会に入る。鹿子木先生の力ある講演、哲理的にマルクス論を較撃したるも日本精神を説かざる点は遺憾なり。中谷の論は政治論にて態度もよし議論も亦よし。闘士たるを失はず。終つてダルマ屋にて批評をなして終る。東京羽田より小野上來援す。緊急動議にて中原を推し県議戦〔選〕に立たしむ。

欄外 鹿子木先生によりて指導原理の教をうけたり。

【語句の説明】①大塩中斎等の書幅：書幅とは、文字の書いてある掛け物、書軸。大塩平八郎の書軸のこと。

②郊戸神社：柏原山の麓の丘陵の末端、現在の飯田市今宮に鎮座する神社。今宮神社、郊戸八幡宮とも言う。創建年代は不詳だが、一六六七年に飯田藩主脇坂安政によって再興された。

八月二十八日 金曜

晴、北風。北風吹き暑氣を払ふ。午前三時飯田より帰りたれば眠る暇少し。朝吉野館に向向し、午前十時半にて鹿子木先生飯田駅より出

発せられ見送られたり。依て粥川と予も亦之を見送る。先生に再来を乞ふ。見送りに入りて業務を見るに、昨日の疲労見にて神經衰弱（シヤク）の如し。銀行経営の事に及へば常に背に冷汗を覚ゆ。思想の闘士として立つた方か予の適役なるべし。粥川氏より西瓜を送られ、先生等と吉野館の一室で食す。放課後桜町駅に中原、座光寺、中谷、神永の諸士、大島村の演舌会に出席するを見送る。中谷は予と常にカラカイ居りしも、或は中谷が何か為にする処あり、予を排せんとするの望あるやも知るべからず。彼か余りに地方色を見ずして徒に東京流にふるまふは、却て地方の同情を失ふ所以となるべきを憂ふ。日本主義運動、勤勞報国は吾々の主義とする所、之を父に説明したるに父も大に喜びたり。（中略）予は上飯せり。

【語句の説明】桜町駅：一九二三年に桜町三丁目（現在の住所では桜町二丁目）に設置された伊那電気鉄道の駅。駅周辺は、鉄道開通と駅新設によって人通りが多くなり、商業が盛んになった。

八月二十九日 土曜

晴。組合支所から銀行。組合支所では口挽糸の販売として二六五円で商談を近藤、平田商店とした。それから銀行へ上つた。銀行出勤はものうく、現時の銀行業の不成績と将来如何に成り行くべきかを考ふる時、預金者に対する責任、社界に対する任務等を考へる時には眠れなかつた。何故コンナ商売につり込まれたか、既に数年前に予は銀行の今日あるを予言した。目前の営利の為に此の場所へ足を入れたのであつた。事業―世の革命の初期に於ける事業、事業界末期の事業に飛び込んだのであつた。資本主義が没落して新資本主義の台頭の時には既成の株式会社、資産家の間には大変動の起るべきは自然の数であ

る・・・こんな事を考へたが一日も早く銀行業の苦界より身を退きたい、之れか予の念願であつた。午後三時から作興会があつた。会するもの少なかつたが、思想史決算に付ては残本を引受ける事を予は提議したか、北原会長の帰る迄とした。

予記 国防講演会は軍人会の申出により共同主催とする事、神社協会、仏教会等を幹部で経験する事等を議し、大衆新聞には取消を出す事とした。

発信 関口

受信 関島久男。選挙肅正同盟会。

社会の今日 政友は吉川、平田を推した。

【語句の説明】①神社教〔協〕会：各県に「国体を講明し神社の隆昌を計り及其研究並神職の學術德行を向上する」ことを目的として設置され、長野県では一九二四年に財団法人化された。

②仏教会：長野県仏教会のことか。全国組織としては、一九〇〇年、国家の宗教統制に反対して結成された「仏教懇話会」から出発し、「大日本仏教会」「日本仏教連合会」等を経て、五七年に財団法人全日本仏教会となつた。

③選挙肅正同盟会：田沢義鋪、後藤文夫、前田多門などにより結成され、衆議院選挙がもつ「選挙干渉」、「情実因縁の選挙」、「黄金選挙」の問題点を非難し、有権者が選挙費用を一定以上負担することなどを主張した。

④政友は吉川、平田：二十九日には交渉の段階にあつたが、九月四日の下伊那政友倶楽部候補者詮衡委員会で吉川亮夫・平田史郎を本人の諾否に関わらず推挙することに決定した。

八月三十日 日曜

晴。上伊那町へ釣に行く事を福島と江塚と約したが、江塚から破約して来たので止めた。朝テンカラに行った。夕刻も亦行った。終日家居して悠々自適した。カンデイは英国に於ける英印会議に出席する事となった。彼の平常が静坐は必ず行としてやると云ふ事に刺激せられて、予も必ず朝一柱の静坐をなす事とした。鹿子木博士の「日本精神の哲学」を読んだ。次に藤椅子の上で心行くばかり自適した。初めて目前の偷安を試みた。安からぬ世に一日の偷安。組合へも行かず、釣にも行かず、終日家居。増恵、伊藤齒科医へ行った。尚夫、顔面に蜂に刺されカブレたり。和氣、モノムラヒ両眼交互に出来話せず。飛行機高空を飛ぶを見る。選挙肅正同盟会より（新政社）地方選挙に付て如何にして肅正すべきかに付申来る。

社会の今日 県議民政、遠山、北原（源三郎）、片山均の三人を推した。

【語句の説明】①英印会議：この年の二、三月に行われたイギリス総督アーウィンとの会談において、インド民族運動指導者ガンディーはインド憲法起草のために開催される次期円卓会議への出席を約束した。ガンディーは九月から二月までイギリスでの会議に参加したが、選挙区画定の問題を巡って対立が発生し合意には至らなかった。

②新政社：内務官僚田沢義輔によって一九二三年に設立された団体。理想選挙を目指す政治教育を志し、翌年雑誌『新政』を刊行した。

九月一日 火曜

小雨、曇。組合支所を経て銀行へ出勤す。銀行の前途風前の灯の如

く、貸付回収出来ず、預金は引出さるゝのみ。每日一、二万円は減し行くので心淋しき事限りなし。放課後西上柳を訪問したるに、敏雄不在にて長江を相手として千代田商会の決算に付て取調ふるに、保険料の生計費に私消したるもの多く、之を如何にすべきかに付て考へざるを得ず。来る五日再調査約して上柳縁と面会して夜九時帰宅す。勤労党、作興会、銀行、組会〔合〕の事、沢山ありて其の取捨に迷ふ。

九月二日 水曜

晴、小雨。朝家を出る。組合支所に立寄て工場を一巡して後、吉川を訪問す。亮夫居りたれば会ふ。鮎一円を買ひて吉川に贈る。談は県議戦〔選〕には出馬をするも、予は之に加勢出来ず、家の為に止められん事を懲瀆す。亮夫も之を諒とし、県議としては立候補せざる旨を答へ、又小学校職員校長間不和にして紊乱し居り、小林校長辞職届を差出あることを聞く。八幡支店に立寄りて、丸山昌寿新に入学したれば行員に紹介し茶菓を饗て話す。龍口、亮夫に電話にて、手形償還請求の手続の為、亮夫の捺印を頼み交渉せるを見る。上飯、午前十時銀行出勤す。午後一時より商業学校講堂に於て、元寇襲来六百五十年祭を挙行し、軍部より平賀少将来会して講話（国防に付）する筈にて、近村より来り聴講者多く堂に満ちたり。元寇六百五十年祭を行ひたるに会場狭くして神官の通路さへなし。此祭典は作興会、軍人会及神社協会の主催なり。聴講者多数にて外に立つもの多ければ、会場を飯小講堂に移す。平賀將軍の満蒙問題、講話類下手にして、新聞記事の又キ売をするもの、如し、其論旨も不明瞭にて、此講演は大ミソを付け、聴衆三三五々退出す。

坐談会ありしも出席せずして山本に行く。牛肉二百匁を土産として

仲田の清内路植林山を視察する為なり。山本に一泊す。

【語句の説明】①飯小講堂：現・飯田市立追手町小学校講堂のことか。一八七二年、旧飯田藩文部所を改造して開校。九二年、高等科を併置し、飯田尋常高等小学校と改称。講堂兼体操場が一九三一年に落成。現在登録有形文化財。

②平賀將軍：平賀貞藏（一八八二—一九五七年）か。陸士十四期。一九三二年八月一日少將、歩兵第二十八旅団長（高崎）。

### 九月三日 金曜

曇、小雨。山本二泊して朝五時起きて仲田と打合して、清内路の小日向に於ける仲田の植林を視察に行く事とした。嫂が弁当の仕度から万端してくれた。朝六時半に朝露を踏み分けて秋草の咲き乱れる中を大明神原を通過して鳩打峠に向ふた。萩や秋の七草がよく咲いて路をふさいで居る。大明神原は、近年全部開墾せられて五、六十町歩の所か全部畑となり、新しい村の様になんか農家が出来、西瓜や陸稲が作つてあるのを見る。田畑広く開けて、いかにも新しい村の様が見られる。鳩打峠に上る兎の漁夫らしい装が面白い。又其の大地をふみめて昇る態度から見ても、如何にも一歩一歩大地を踏みしめて行く様に見へて、後から付いて行くも前者の手下が思はれた。峠に一休して仲田宛の文を紙にかいて立て置いて下る。途中で中田及下男に会話し、共に植林地に向ふ。檜の密林なり。樹令廿年に満たず。立派なる植林、実測五、六丁歩はあるべし。間伐せざるを遺憾とす。一巡して山の神に憩ふ。里人キビを饗応しくれたり。其の美味云ふ計りなし。石割に下り、兄のアメ釣を待つ。午後三時より釣を始めたるも、数日来三、四回に亘り毒モレしたる後なれば魚居らず。遂に一尾も獲ずして止め兄

は六、七尾を獲たるも皆小し。午後六時帰宅。疲労して眠る。予記 信也か東京へ遊学に出發した。

【語句の説明】①大明神原：川路大明神原か。現・川路大明神原遺跡。飯田市川路地区に存在。東を天竜川、北を久米川、南を弟川に挟まれる面積約六、一六平方kmの地域。かつては広大な桑園地帯をなしていたが、現在は一九六一年の水害等を受け、その地形をとどめていない。

②鳩打峠：飯田市大瀬木の西方に位置する峠。伊賀良地方と清内路方面を最短距離で結ぶ峠道として古来から往来がある。

### 九月四日 土曜

晴。山本へ泊つて兄と父と鼎坐して朝汲茶を啜り乍ら経財界の不況や農村の行つまり、親類や掾者の倒産不如意から嫁談の事等話し合ひ、銀行業の不況や信也の嫁の事や種々話して嫁の世話を頼んだ。朝銀行へ出勤する事としたが、足か重く悠々九時迄話して自動車で銀行へ来た。仲田長志山見物の話をした。頭取に見取図を書いて報告した。

山行の為に脚が痛んで疲労も増し、身体の倦怠は止まなかった。氣もいら／＼として、銀行業も刻々団末場〔断末魔カ〕に近づきつゝ、ある感かした。一日も早く此難局より逃避する事か賢明な策であるけれども、義理と大平の無能を見ては逃げる事も出来ず。若し予が逃出せは、倒産は免れん運命である。〔中略〕吉沢秀雄一味か来行する筈であったか、彼等の都合上来行しなかった。午後下田を召致して大衆新聞か「作興会の費用を横取して勤労党が形造られた」云々の記事に対して其誤報なる事を取消文を出さしめたが、今日の新聞に出て居るので猶追求すべく試みんとしたか止めた。午後七時帰宅して父と山本行

の話をして寝に付いた。新聞等もロク／＼見る事は出来なかつた。

【語句の説明】 大衆新聞の記事：州平が実際に削除を主張した記事は見当たらないが、県議選において同新聞は、愛国勤労党に対して「ブルジョアの走狗」「インチキ党」とするなど批判的な態度をとり、無産政党を支持する姿勢を示した。

九月五日 土曜

晴、小雨。残暑は暑かつた。稲作も残暑の熱で見直したと云ふ説も多かつた。米も郡農会から政府の米を払下けたので一万俵余も入荷（郡内へ）したので、米価は地方的に下つた。虫殺しをして持荷する事とした。組合から銀行と常のコースを取つた。勤労党の方も立候補を中原を立てた事と大会をやつたきりで、其後何の音沙汰もなく静かであつたが、何をして此県議戦〔選〕に臨むかを静に見て居られなかつた。世話好きな性分を出して座光寺久男へ電話して何をして居るのかと申送つた。之も種んな仕事に手を出して進退に苦んで居る始末である。牧内一が銀行へやつて来て、大平久男の娘を貰ふて見てくれとの話があつた。

天気か澄んで静寂な初秋の気分は、云ふに曰はれぬよい心地だ。県議戦〔選〕、物質享楽、気分等、考ふれば考ふる程此人世のタラシナサを感じた。然し物質を無視する事も出来ない。

九月六日 日曜

曇、小雨。平穏な日であつたか夕刻から風雨があつた。日曜日なので何となく心閑である。先づ養蚕を見て後、組合支所から本所へ行つた。別に何の用事もないが工場から一巡した。田中句一郎も来組して

居た。今村利一か来て土地買入と資金借入の話があつた。夕刻から雨か降り出した。現業員会を開いて繰糸方法に関する打合会をする事としたが、勤労党県議立候補問題に付て打合会があつたので上飯、タルマ屋に入つた。青年か十名計り集まつた。其の議論は多くは理論で實際問題にはふれなかつた。先づ中原を前の大会の決議の通り推す事とし、予に事務長となれと強請したが、予は受けなかつた。

中原は、南信学院の経営か苦境にあるから之を引受けてやつてはどうかと話があつたか、之れも断つた。青年諸君の話は、予に何もかも厄介なものは押付ける様な気持ちであつた。予は一笑に付して相手としなかつた。併し予は事務長をせよと云ふ強請に対しては、一考さしてくれと其場を逃けた。若し予が事務長を引受けねば立候補は止めると中原は放言した。予は諸君の言の様に単純にはゆかないと云ふた。予の父を説得する為に来訪すると云ふて居た。父説得係が必要であると云ふて居た。夜の十二時過に散した。

予記 青年の純理の行動は実に不可解なもので、中原はよく其波に乗つた。予は青年よりは却て迂考なりと見られて不利な立場にあつた。

九月七日 月曜

晴。秋の冷かなか虚冷か心地よい。薄暗い椽の下でかすかに虫か鳴いて居る。県議戦〔選〕等と云ふて人間は騒いで居るに比すると、虫を聞く境地は殊に面白い。朝銀行へ出勤した。大平頭取の来行を待つた。午前十一時頃やつて来た。直に捕へて、銀行の預金がガラ／＼減して各取引先から取引を断つて来る状況や、此俣にして居れば自滅の外はない、其時の状況は目も当てられん状である、此俣無為にして拱手すべきでない、何とか窮余の一策を立て、乾坤一擲の手段に出つべ

きであると説いた。併して其方法は、小林暢氏へ頼んで大蔵省から高圧的にでも合併（地元銀行）さして貰ふより外に手段はない、吉川芳太郎に話して小林氏を動かす事とするより外に策はあるまいと献策した。頭取は冥目して聞いて居た。予は献策して置いて自席に戻つて仕事をした。午後、吉川芳太郎、山口英九郎の両取締役かや（つ）て来た。幸に上柳、井村両氏を招いて重役会を開いた。預金の漸減するに對する銀行の面白からざる状況を報告した。良策もなかつた。吉川氏は合併問題に付て話した。彼は信産との合併か何より先たと意見を洩した。銀行の問題に殆んど今日はつきた。中原から金を出してくれと申込んで来た。又福住からも同様な事を申込んで来た。出すべき金は出すか、無限には出せんと話した。

父か左の手脚かしげれるとて、吉川医師を招いて診察してもらつた。母と増恵も診察をうけた。

九月八日 火曜

晴。組合を経て銀行出勤す。（中略）放課後愛勤党委員会あり、タルマ屋楼上に於て打合会をなす。依て出席したるに集まるもの十七名計り。中原は予か事務長をしてくれれば県議戦（選）に立つと云ふ。其他の諸青年も是非予に事務長をやれと懇渾す。事務長なるものは新聞の編輯人と同様にて、責任を負ふものに過ず。予は絶対に通るも、青年は其意志通ぜず強いて余に依頼せり。予は固辞す。粥川も来り合し、更に言を改めて予を事務長に懇渾す。固辞す。其理由を粥川に話す。夜過ぎて午前三時なり。中原と予との間には以前よりの関係にて種々仕事をなし居たれども、中原は予を引込みて資金の調達機関とせんと企て、予は其陥井には入らん事とし、中原は青年の意中を察して

其作戦を試みたり。予は孤立の地位に陥りたるも、猶話を続けんとせは争となり分立することを恐れて、午前三分散。予記 今晚の会合も予を事務長とせしむる能はず。予は黒幕となりて尽す事を主張す。

九月九日 水曜

晴。残暑強。胸中の悶々の情消へず。銀行を止めるか又は組合を止めるか。銀行を止める方が自個の立場上はよけれども、今迄なし来りつ、ありし重役諸賢に對して義理悪く、資本主義壊滅期に於ける資本主義の首魁たる銀行業に従事せる予の不運と不明とを憐むのみ。組合の方を止めんか將來銀行と運命を伴とする社会より葬られん事を恐る。進まんか義理を失し、退かんか社会上の立場に苦む。（中略）。銀行へ十一時出勤す。頭取に話して、此場合拱手自滅に任すの時でない事を力説し、頭取も上京、伊那Bの増資前に上京して運動を試みる事とせり。併し頭取の無策と人格の秋霜烈日の如き態度とは銀行業者として当局を動かす力ありや否やは疑問とする所にて、金田と兩人にて強いて運動に出かけしむ。

放課後吉川亮夫来行し、十日夜ミトリに会合し県議出陣勧誘に行く事を告げたり。

終つて後千代田商會總會に出席し、事業を監査し注意を与へたり。喜右衛門に父よりの伝言、受判せてもよい事（中略）を話す。

欄外 愛宕社の火花を銀行樓上に見る。

【語句の説明】愛宕社：飯田市大久保町の愛宕稲荷神社。

九月十日 木曜

晴。組合より銀行行き、虚勢を張りたる商売をする事か予の性に合

はず、人を瞞して金を儲ける此商売なるもの面白からず。特に法にかけても強請する金貸業、何故此の如き途に入りたるかを今にして自ら怪む。併し自ら不明として乗り出したる商売如何ともし難きを奈何せん。放課後午後七時より八幡ミトリに於て吉川亮夫立候補懇談会あり、予も招かれて出席す。但し亮夫には既に前より今回は出馬せずとダメを押し、又吉川の家を潰すに忍びず此度は止めさせた方かよいと思ふて居り、今回はやらんと云ふ言を信じて彼を強いて推すはよろしからずと思ひ、中原を推す事とせり。ミトリの会合は五十名計り集り、福島座長となりて吉川県議再選を満場一致賛〔賛〕成し、交渉委員を挙げ政党政派を論せず推す事と決したり。交渉委員として予も亦其一人となり、翌朝吉川を訪問して其旨を告げる事とせり。

九月十一日 金曜

晴。〔中略〕放課後中原の依頼により龍江村に行き奥村村長と龍峡亭に会見し、中原立候補せは拳村一致出来るや否やを確めたるに、可能性ありとの事に、然らばとて松尾久米、精一両氏を召致して勤労党の選挙方法を説き、拳村一致を頼みたり。尚塩沢芳雄老を夜十時叩起して来意を告げ、中原立候補すべければ了解せられたしと告げたるに、老はフルヘタル声で時勢も興りたれば皆様がソー云ふてくれるなら止むを得ざるべしと答へたり。夜一時過帰。

【語句の説明】龍峡亭：長野県飯田市龍江、天竜峡沿いに建つ温泉旅館。龍江村営の社交場であつたが、一九三七年十一月に料亭として開業。

九月十二日 土曜

曇、小雨。二百十日なれば小雨降る。疲労した身体を直に上飯、銀行に出勤す。頭取上京したれば不在中特に用事ありては済まずと思ひ、特に早く出勤す。金田、辰野、伊那町、高遠支店巡視に出張す。行務種々雑然として起り来り見る。小使も久しく病氣し居れば、若き行員掃除等せしむ。頭取の大蔵省訪問の模様聞くに、頭取の運動下手にして人をチャームする力に乏しく、運動等には最も下手な事を曝露したるものなれども、彼が大蔵省の銀行に対する態度の極めて冷酷にして潰れるものは潰れるに一任すと云ふ態度、歴然たり。金田は頭取の態度の運動下手なる事を承知して頭取ては駄目と予言したるも、不幸にして適中せり。放課後タルマ屋に勤労党選挙委員会開かれ出席し、選挙事務長より其他の事に至る迄意見を具し青年の参考とし、又龍江村と村長及松尾久米、精一両氏を訪いて中原推薦の話をなしたる旨を報告せり。事務長として適任者なし。夜十二時過迄相談し身体綿の如く疲れたり。

予記 電話にて在京中原へ龍江の模様話す。

〔九月十三日、十八日は記述なし〕

九月十九日 土曜

晴。犀北館を出て、午前六時半の汽車に投して帰途に付く。辰野支店に立寄りて川島組合よりの問題を聞く。正午過ぎて帰行し、頭取に上京及長野に於ける小林、塩川両氏と面会の模様報告せり。伊原氏の意見としては地元銀行合併を前沢氏の手を経てなすべし、又小林氏に名刺にて紹介すべければ面会すべしとの事にて、伊原氏病状経過不良



の如し等報告せり。小林氏は県下銀行合併につきては案なしと。伊那銀行増資の件は大蔵省にて許可すまじ、齋藤林五郎氏に頼む件は氏の病気の為実行不能等報告せり。吉川より電話来り、亮夫の選挙に付如何にすべきかに付問合せ来る。大平と相談して帰宅して自ら割り切るより外なしと。

【語句の説明】犀北館：一八九〇年八月、長野県長野市県町に開業した西洋風旅館。

九月二十日 日曜

晴。午後に至りて組合支所より本所に行く。併して秋蘭今日より受入を初めたり。秋蘭は掃立平年に比して六分なれは（四分減）、収蘭も一万五千を越へざるべしと思はる。桑の価は葉桑一貫目廿二、三銭位をとなへたり。桑の梢延び短くして桑葉少し。

村内、多くの違蚕はなき様なれとも豊作にあらず。午後四時頃上飯して達磨屋の選挙事務所へ初めて出頭す。青年多数来り、未だ陣容整はされとも熱心なり。弁論日の決定及選挙委員の決定等を見るに、医師吉川氏事務長たり（予に事務長を押し付けんとしたるも受けず）。作戦計画は単に弁論隊と推薦状発送の二つに止まる。併も其推薦状は雄叫を以て之にかへんとしたるに抗議ありてなし得ず。大に郵税に付まごつきたり。片桐は吉川医師か事務長となしたるものは予にだまされたと話ありしも、だましたるものに非ず。事務長をよく引受けたるものなりとあきれたり。吉川氏も一生懸命弁論隊に入りて転戦せり。予記 朝、中原選挙の軍資金の件につき片桐寿来訪し五百円を出せとす、められたるに、そんな金はない、多少の金は出し得るとするも。

九月二十一日 月曜

晴。午前三時帰宅して就寝したるのみなれば、睡気を催して午前八時頃迄床に居りしも熟睡出来ず。直に銀行に出勤したるも午前十時なり。電話を以て湯田中にかけて吉川と打合せたるに帰省せずと云ふ。

然らば如何にすべきかと策を考へたるも、吉川推詮〔薦〕候補の事務所も出来、用意出来たれば今となつて揚げも下けも出来ず、策の施し様もなしと答へたり。吉川芳太郎来行し、銀行の前途及予か亮夫を伴ひて上京したる件につき如何に進捗せしかに付心配して経過を聞き来行したれば、吉川亮夫選挙と銀行の将来とに付て頭取と三者にて熟議し、予は上京及長野に於ける塩川、小林両氏との会見の模様を告げて其報告をなし、亮夫選挙に付てかくなりたる以上、村長は辞せしめずと頑強に主張せり。依て種々相談したるに、兎に角数日前迄は帰らずとの話をなせり。放課後、猶勤労党選挙事務所に入りて言論戦を主とする戦術に就て青年等の作戦を見、各地に転戦する弁論隊を激励せり。午後十二時過、午前二時に至つて漸く散し帰る。神永、弁論隊として出陣し予の弁論綱領を示す。

綱領に曰く、

- 一、吾党の主張
- 一、既成政党の非
- 一、売国無産党の非
- 一、愛国的中原を落す事あれば南信濃の愛国者、祖先の顔に泥を塗すものであると結論せよ

と云ふ。

吉川芳太郎氏銀行へ来訪せり。併して銀行問題及亮夫選挙の件につきて相談す。

欄外 英国金本位停止。

社会の今日 滿蒙事件國際連盟の干渉。

【語句の説明】 英国金本位停止：九月十八日、世界的金融危機のなかアメリカからの追加借款を確保することに失敗したイギリス政府は、翌十九日イングランド銀行に対して金引渡し停止命令を出し、二十日には公式的に金本位制度の停止を宣言した。

九月二十二日 火曜

晴。秋高く気清く、稲田黄にみのりて初秋の気分よろし。伊沢収入役来訪して、吉川推薦候補の事務所八幡吉永材木店の二階に開かれ福島文之助事務長として就任せり、塩沢新九郎、木下仙次郎、竹村要人等の連中参謀となり運動なし居れる事を聞く。又予が一村会議員として拳村一致にて吉川を推薦するに中原を推すとはケシカラズ等評し居る由を聞きて事務所を訪問し、福島事務長に面会して来意を告げたり。曰く予は前回交渉委員として吉川を訪問し県議に起意を問ひたる時吉川が固辞せられたれば、真に辞意を有するならば予は友情上中原を推すべしと告げ、吉川氏及其他交渉委員の了解を得置きたるも、其後推薦となりたるを以て今迄御無沙汰したるが、事務長も定まりたるに付小生の立場上中原を友人として推す事となりたるを以て宜敷と挨拶せり。猶他の諸氏にも宜敷伝言を頼みて辞去す。其の内に上郷より矢崎安二、岡島大吉の両氏来りたり。銀行出勤し放課後中原事務所に行きしに、午後六時頃中谷来訪し、予に苦言を呈すとて上京両青年の教育は世事上の事にあらずして真に日本主義の闘士を作るを以て目的とするから若し不同意なれば返してもよしとの事なり。尚予か早く帰飯せずして長野に滞留せし事等難あり。

直に若松座に於ける飯青主催の応援演舌に出行。予は代田、片桐等と話し合ひて演舌のみに主とする選挙は内容空虚なりと告げたり。又松島仙吉来り龍江出身者の後援ありたり。午後十一時帰宅して寝に付く。予の事のみ罵詈し、不快言ふはかりなし。

社会の今日 滿蒙事件出兵如何に成行くかを憂ふ。

【語句の説明】 若松座：飯田市街、広小路通りに位置した劇場。

九月二十三日 水曜

晴。夜更くる迄勤労党中原選挙事務所居たれば、朝遅く迄就床して午前十時出行す。足重くして銀行の運命も知るべからず。午前中執務して午後一時より組合本所に理事会あり出席す。英国金支払停止、生糸暴落、滿蒙事件等にて仮渡金三円と定めありしも之を二円半と決し、午後五時帰宅して釣に行く。釣を垂るれば財界の不況も何もなし。夜に入りて選挙事務所へ出頭す。事務員を集めて、弁論戦の如き浮きたる事よりも各自居村に帰りて内容をかたむるに如かずと決し、協議せり。予が各事務員を督励して其任につかしまむ。中谷演舌会より帰りて怒りちらし手の付け様なし。松尾村に演舌会ありて五百名の聴講あり、盛況なりし由聞く。鼎村は黨員もあれども一向に振はず、働くものもなしと聞く。午前二時帰宅す。選挙に付ては金もなく推薦状の発送も遅れ本朝一万余を出したるのみなり。尚低力なる運動は手つかず。予記 秋爾解きをなす。下男久男の努力により上爾廿三貫を収爾せり。〔後略〕。

九月二十四日 木曜

晴。午前三時に帰宅したので朝七時半迄床中に居た。〔中略〕余り

各方面共四面楚歌の声はかりなので釣に行った。弁天附近を試みたけれども、二三時間の間何者も獲る所はなかった。帰って飯田へ行った。中原の選挙事務所では予か顔を出さんので怒って居た。事務長の吉川は予に直接「何で君は出て来ないのか」と詰問があった。予はダマサレテ事務長となつたけれども、君がやつてくれなくては仕方かない、君は組合や銀行や種々やり過ぎる等と云ふ事も彼の口から出た。併し彼の肚裏には選挙の結果に対する恐れもあり、何でも其結果を予に転化〔嫁〕せしめんとする肚か明であつた。予は種々用事があるから事務長は懇請せられたが受けなかつたのだと云ふて、余り相手にしなかつた。それから弁論隊か帰つて来た。中谷は予に対して話かけた。

予は新聞の記事に余り信を置くなと云ふた。此言に色をなして食ふてか、つて金の話となると君は話をそらして逃けると云ふた。作興会と勤労党との事に付ては、作興会則勤労党ではないと云ふた。此事に付てもケンカをした。中谷は吉野館へ引上げた。而して東京へ帰ると電話で云ふてよこした。中谷も事務所へ来ては怒号し続けた。余り好感は持たなかつた。殺氣立つた事務所は不愈快であつた。予か金を出さんと云ふ事に付て諸方から悪罵が出た。併し予は金を出す器械ではない。之を遇するに道を以てせよと窃に考へた。

#### 九月二十五日 金曜

晴。午前三時に帰宅した。村の内は吉川が午前十時に帰宅して候補に立つことを認めて運動にとりかゝつた。氣勢もそれから揚つた。之に反して中原の方は僅に青年か少し運（運）く位のもので、運動が徹底して居ない。さりとて銀行業者として運動の火中に投して中原の為に尽す事も出来ず、頭取から電話で中原にも運動員代田にも銀行家森本は業

務か終つた後でなければ選挙事務所へは行かれんからと話した。予も銀行か終つて後事務所へ行った。〔中略〕。吉野か話に来た。彼は予に選挙費用の尻ぬぐひを引受けよと懇請せられた。併し予は受けなかつた。事務長を予に充てつけた態度も礼を失するものだと予は云ひ放つた。それから吉野と共に事務所へ行った。大横町の連中か事務所に事務長か居らんと云ふて怒って帰つた。それから中原の宅へ行って金策を相談して大横町へ多少の費用を送る事とした。今村と代田と予と三人行つた。朝になつた。遂に一時間計り寝た。

#### 九月二十六日 土曜

曇雨。銀行の業務は一層六ヶ敷なる。信聯からは預金は出ない。朝父か村の模様を心配して、村会か朝八時からあるから役場へ行く様使者をして申送つて来てくれた。父も予か吉川事務所で悪声を放たれて居る事を心配し、是非村会へ出席する様言ふて来てくれた。僅に一時間計り眠つた。予は直に起きて役場へ行かんとしたが、電話で聞いて見れば既に終了したと云ふので行く事を止めて銀行へ出た。刻々吾等の主張は金の力や既成の政党の力で蹂躪せられて行く様であつた。銀行では本島事件の善後策を講じた。金のやりくりで奔命した。政事及金との二道で苦心するの乎と思へば可笑しくもなる。本島も遂に銀行へは親戚を連れて来なかつた。選挙事務へ夜になつて出頭した。各村からの青年か為す処を知らすと云ふ状態で事務所に参集してくるのを追ひ返して、各自村の投票獲得に当らしめた。中谷は大声でどなる。金はない。吉川事務長はスネ出す。混沌其物である。此事務所、始めより選挙は少し無理であつた。それでも青年や今村、代田は一生懸命に働いた。弁論一点張の此選挙か何如に結果するかは見物であつた。

既成政党は沈黙を守つて投票の獲得をする。無産党と吾党は弁論戦で常に相對峙する面白い場面の選挙である。

予記 銀行と選挙とか頭中へ混沌として居た。

九月二十七日 日曜

雨后天晴。県会議員投票日である。父も予の身上に就ては心配した。吉川の事務所では予の立場について憤慨して悪罵を浴びせて居る。吉川派は廿四夜大会議を開いて金策を講し、猪佐雄が組合から千五百円を借りて運動費を調達した。それから氣勢が揚つたと云ふ。予は午前中父と種々選挙の話をした。午後組合から役場へ投票に出かけた。既に千百の投票が終つた後であつた。高橋文五郎は予の胸中を察し同情して居た。組合本所へ行つた。秋蘭受入も既に七分通り終りて九百貫計り入荷があつた。午後五時頃自動車で中原、中谷、吉川（医）、永井か選挙の礼たと云ふて天竜峡見物少々やつて来て礼を述べて去つた。夜八時に飯田発と云ふので見送に行つたか見当らず、空しく帰りて事務所を訪問し九時帰つた。電話で金田から本島が絞れて死んだと云ふ事を知った。銀行と選挙の両面苦境に立つた。最早選挙はイヤだと感（観）念した。事務所では青年連中が選挙結果の予想をして居た。中原、中谷の連中が何故予を訪問したかは疑問である。

予記 内憂外患一時に来襲す。国際連盟の戦争中止の仲裁をなし、支那は之にすかつて日本をケン制す。出兵損に終らされは幸なり。閣員軍部は強硬、外、蔵はナン弱。内閣不統一。此破タンの民政党を県議戦〔選〕下勝つ。日本の将来寒心すべし。

【語句の説明】 国際連盟の戦争中止の仲裁：九月一八日の柳条湖事件後、中国は同月二十一日に国際連盟に日本の行動を提訴し、緊急理

事会の開催を要求した。理事会は二十二日に開かれたが、日本は中間の直接交渉を主張し中国と対立した。

九月二十八日 月曜

晴。銀行へ出勤す。大平頭取其の俸給をさいて予に加俸せんとして、俸給簿に予に何の沙汰もなく記帳して之を示さる。予之を拒否して受けず。（中略）次て大原繁夫来行し、皇室中心主義はよけれども中原をかつきしは不賛成なりと予に告ぐ。又松沢来行し予が思想団体と勤労党とを混同したるを責め忠告をなす。県議選の後、世論囂々たり。中原は落選するとは一般の世評なり。原貞治郎も亦予に作興会と勤労党と混同したるは宜しからずと云ふ。（世人は此の如く見るか当然なるも、党と作興会と同一のものにあらず。作興会員一政党员として動く事何の非あらんと信す。終日銀行て行務を見て万感交々来る。自分の立場の社会より重視せらるゝに顧み、去就は六ヶ敷ものなり。夜に入りて庄太郎、喜久太郎来訪し家政整理に付相談あり。借金二千五百円あり。之を如何にすべきかに付相談ありたれば、最も多額なる\*佐雄の借金を如何にすべきかに付相談し来れと云ひたり。

予記 予に対する世間の見方

- 一、勤労党として運動したるは作興会を潰す事なり
- 一、勤労党として予か余り働かざりしは頼もしくならず
- 一、予か吉川に反対して中原を推したるは変節なり
- 一、勤労党を支持するは銀行家として宜敷からず

総て非難の的となる。

社会の今日 廿六日横須賀地方大暴風雨被害あり。

【語句の説明】 ①県議選の後、世論囂々たり：他県の県議選での民政

党の優勢が伝えられ、長野県での政友会の巻き返しが新聞紙上をにぎわせた。

②横須賀地方大暴風雨被害：関東全地域において豪雨被害が発生。横須賀では、前日の二十六日の豪雨で死者も出ている。

九月二十九日 火曜

雨。朝父と話した。吉川か当選したらば如何にすべきか、村長をうけるだろうかと云ふ問題か先決問題であつた。今日は県会投票の開票日である。若し当選した後彼は云ふへきてない。亮夫か黙つて村会の推薦をうけて村長となれば、彼の父芳太郎は其主張を裡切るものである。亮夫は自ら県議の底意あつて吾々を欺いた事となる。予は芳太郎を訪問して銀行合併の相談から始めて本島愛三郎の縊死事件及村長受諾問題に至る迄一通り芳太郎と話した。併して私は君の言を信じて中原を推し、村民の不信を買ふに至つた、亮夫氏が将来政治家として立たれるならば御止めは申さぬ、併し家の為には或は取らざる処である。と芳太郎に忠告を試みた。亮夫も芳太郎も村長を直に請けんと云ふて居た。午後出勤した。同じく資金の運用に心配した。各支店も稍軽き足の気味である。殊に赤穂の宮沢要治郎は其成績から云ふも極めて逃避的であつた。他の支店へは少しも内面は知らせなかつた。県議選挙票は女学校と聯合事務所とで開票せられた。中原は当選した。最も疑問視せられた中原が、併も第四位で当選した。事務所を訪問して群れる青年に挨拶して表で万歳を三唱して散せしめた。事務所は大騒いで居た。勝て甲の緒を締めるべく注意した。

社会の今日 県会選挙開票。平田、吉川、中島、中原、関川の順で当選。遠山、羽生落選。

【語句の説明】①県議選挙開票：県全体では民政二十五、政友十九、労大一、中立一。

②下伊那郡における得票は以下の通り（最終結果は平田、中嶋、吉川の順）。平田史郎（前職、政友）六千七十七票、中嶋定雄（新人、民政）四千九百十四票、吉川亮夫（前職、政友）四千八百二十票、中原謹司（新人、中立）四千四十三票、関川一実（新人、民政）三千九百四十四票、遠山方景（前職、民政）三千七百七十票（落選）、羽生三七（新人、労農）二千九百十九票（落選）。

九月三十日 水曜

雨。組合支所へ午前十時出勤した。保険署から役人が来て、被保険者の調と不法の件のなきか取調に来て居た。此男書画の好きな男で象山の書のある事等の話もあつた。組合支所から伊那社に大平久男を訪問して、娘の牧内へ結婚申込に付て諾否をたしかめるべく久男に話しかけた。大平は内心拒絶する様子もなかつた。併し急ぐのでは困ると云ふて居た。次で伊那社を将来如何にすべきか、役員会を開く事を相談して銀行へ去つた。放課後銀行では悲愴な話か交換せられた。夕食を金田、吉川、頭取と共にして、営業状況は如何にしても貸金の回収よりも預金の引出の方が多く、到底此の営業を継続するも利益のないのは勿論やり切れない、又借金の担保をすべき有価証券もなく、何時か支払停止を執行するより外ないと決心した。頭取も悲痛な面をして黙した。金田、吉川と予の間に談がかはされた。重役会を開く事に決し、重役に全部を打開けて報告して最後の肚を決する事とした。予の決心も出来た。世間の囂々たる様子や新聞の論調等も予想せられた。断あるのみ。併して支店閉鎖資本金の切詰をするのは此機を置いて他にな

いと決心した。

予記 遠山と羽生労働党の落選は痛快なり。併も羽生の得点か松尾より百五十票出てしは将来を察知し得る処なり。

社会の今日 英国金本〔位〕停止。